明治二十年三月二十九日内務省文書 3337

特64 721

繪本徳川盛衰記

目次

徳川氏祖先の事 并ニ 家康駿河ニ人質の事
家康氏實と和議の事 并ニ 姉川合戰の事
長篠合戰の事 并ニ 家康甲信二國を得る事
小田原征伐の事 并ニ 奥州動乱の事
関原合戰の事 并ニ 賞罰を行ふ事
秀忠將軍宣下の事 并ニ 琉球征伐の事
大阪合戰夏陣の事 并ニ 豊臣氏滅亡の事
家光將軍宣下の事 并ニ 伊賀越仇討の事
家綱將軍宣下の事 并ニ 由井正雪の乱の事
伊達騒動の事 并ニ 芥川の駅仇討の事
赤穂浪士仇討の事 并ニ 宝永山出現の事
桶狭間合戰の事 并ニ 家康織田武田ニ盟約の事
味方原合戰の事 并ニ 信玄笛音を聽く事
小牧長秋合戰の事 并ニ 秀吉家康と婚を結ぶ事
朝鮮征伐の事 并ニ 秀吉遺命の事
家康將軍宣下の事 并ニ 朝鮮人來朝の事
大阪合戰冬陣の事 并ニ 豊臣徳川和議の事
家康薨去の事 并ニ 福島正則斷絶の事
天草騒動の事 并ニ 家光薨去の事
四代將軍治世の事 并ニ 蝦夷酋長乱をおこす事
綱吉將軍宣下の事 并ニ 亀山仇討の事
家宣家継治世の事 并ニ 宗禪寺馬場友討の事

吉宗公治世の事 并ふ 天一坊の事
家治公治世の事 并ふ 田沼騒動の事
仙石騒動の事 并ふ 大塩騒動の事
波利渡來の事 并ふ 海岸守衛の事
朝廷攘夷を主張すの事 并ふ 勤王慷慨の士獄ふ下る事
和宮関東下向の事 并ふ 坂下騒動の事
勅使関東下向の事 并ふ 島田鳥首の事
将軍上洛の事 并ふ 波吉等攘夷を促し事
長人幕府の軍艦を殺し事 并ふ 七卿長門へ落事
将軍再上洛の事 并ふ 政令再び幕府に帰し事
長藩禁闕を犯し事 并ふ 正義の士討死の事
幕府大挙して長藩を伐事 并ふ 将軍進発して兵を罷事
伏見鳥羽合戰の事 并ふ 東軍大敗の事
家重公治世の事 并ふ 加賀騒動の事
家齊公治世の事 并ふ 蝦夷騒動の事
家慶公治世の事 并ふ 銭屋五兵衛處刑の事
家定公治世の事 并ふ 英米露国交易を請ふ事
家茂将軍宣下の事 并ふ 櫻田騒動の事
島津三郎浪士鎮撫の事 并ふ 毛利侯建言の事
幕府大改革の事 并ふ 浪士等奸徒を斬る事
長藩外國軍艦と戰ふ事 并ふ 薩人英艦を撃事
和州天忠組の事 并ふ 但馬銀山擧の事
筑波山結黨の事 并ふ 武田等加州に投じる事
尾州侯毛利氏の罪を問ふ事 并ふ 高杉兵を擧事
慶喜將軍宣下の事 并ふ 幕府政權返上の事
官軍東下慶喜恭順の事 并ふ 田安亀助家督相続の事

二代秀忠
四代家綱
三代家光

五代綱吉
大久保彦左ヱ門

六代家宣

七代家継

九代家重

八代吉宗

十代家治

十一代家齊

十二代家定

十三代家慶

十四代家茂

十五代慶喜

徳川氏系譜

清和天皇——源經基——義家——義國

義重——義季——頼氏——教氏

家持——満義

政義——親季

有親——親氏

信光——泰親

親忠

親長

乗元

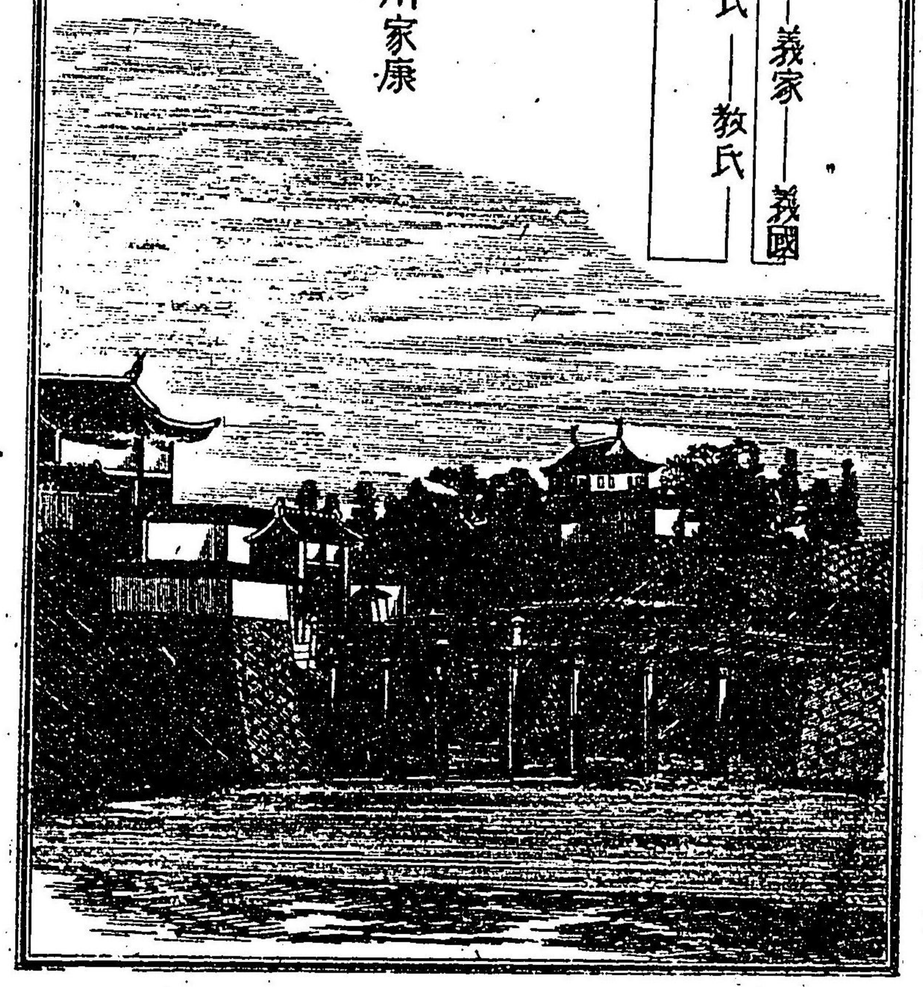
長親

信忠——清康

信孝——康忠

康孝——僧成譽

第一世徳川家康



繪本徳川盛衰記

○徳川家祖先の事并家康駿河ゝ質とゝる事

治極まつて亂を生ゝ亂極まつて治を爲しと我國の政權一度武門ゝ歸ゝ平家世を取て三十年榮花の夢も忽ち西海の藻屑とゝなり源の頼朝鎌倉ゝ覇府を開きゝも僅かゝ三世親族相害ゝ北條陪臣とゝて天下の政權を秉る事九代高時ゝ至り一門東勝寺の烟とゝなり故尊氏の子孫室町ゝ將軍とゝて天下ゝ號令を爲す事十三代の永きも一日干戈の止時なく遂ゝ應仁の亂ゝ及ぶ群雄各所ゝ蜂起ゝ英雄織田信長稍日本半國を鎮定しと雖も逆臣明智光秀か爲ゝ弑せられ光秀僅三日ゝて山崎の露と消へ英傑羽柴秀吉全國を鎮撫すと雖も其子秀頼暗弱ゝ〜て動亂を生ゝ人心終徳川ゝ歸ゝ天下の政權全く徳川家康の掌握する処となり子孫十五代三百余年の泰平を致せり怎も徳川の祖先を尋ぬるゝ清和天皇の皇胤ゝ〜て第六の皇子桃園親王經基を生給へり世ゝ六孫王といふ鎮守府將軍ゝ拜せゝ始めて源氏の姓を賜ふ其六代の孫新田新重の四子ゝ義季と云有り徳川邑を食て徳川四郎と稱し其末孫ゝ松平三河守廣忠水野忠政が女を娶り。同十一年十二月廿六日一男兒を岡崎の城ゝ生む。其小字を竹

千代と號く之東照公おり。同十六年十月織田信秀松平忠倫と謀て岡崎を攻んとす。廣忠之を聞て筧平三を以て忠倫を殺す。信秀之を知じ岡崎ふ逼んとす。廣忠今川義元ふ援兵を乞。義元人質を求めて許をず。依て竹千代を赴かしむ。時ふ六歳。信秀之を知て策略を以て奪ふ。數日經て信秀使者を岡崎ふ遣し。貴息我國ふ有り若之を全ふ爲と欲せバ。今川と斷來て盟を結ふ可と云。廣忠曰く。殺んと欲せバ即ち殺せ。吾一子愛して信を隣國ふ失ハんやと。信秀怒て竹千代を禁錮す。十八年三月六日廣忠卒じ。年廿四家臣憂て評議區々成処ふ。今川義元後事を慮り其臣朝比奈泰能を以て。岡崎を守らしむ。其後義元織田信廣を攻むる時信秀没して其子信長嗣時ふ今川の將僧大原の曰若信廣を全ふせん若從ハずバ立處ふ之を殺さんと信長遂ふ竹千代を岡崎ふ還し

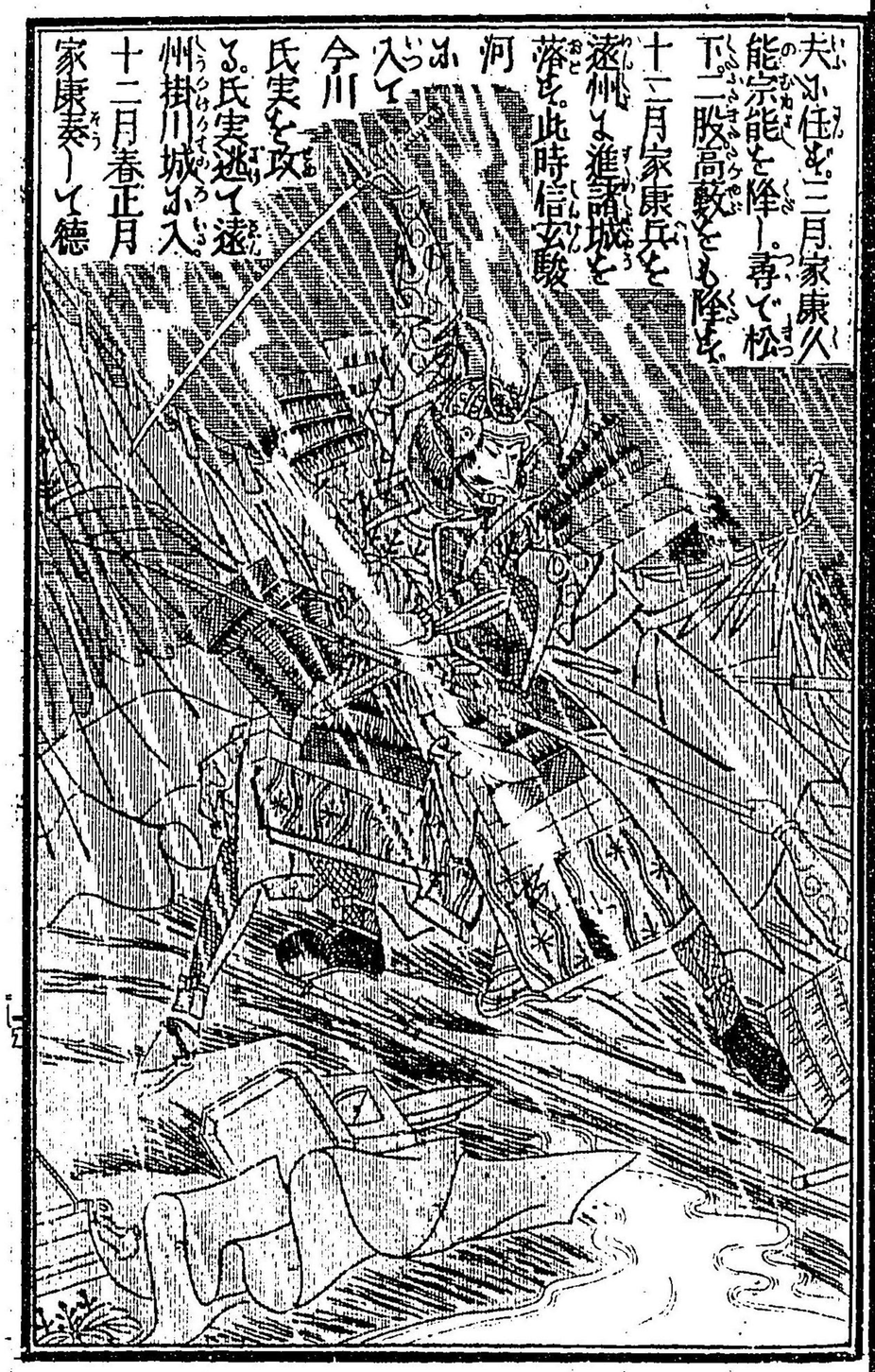
○桶狹間合戰の事并ふ家康織田武田ふ盟約の事

弘治元年八月今川義元兵を発して尾州蟹江城を攻時ふ大久保忠俊忠員忠世等七人谷々槍を揮ふて敵を衝き遂ふ城を陷る之を稱して蟹江の七本鎗といふ。同二年正月十五日竹千代年十五。義元手から冠を加へ次郎三郎と稱し名を元信と改め其族關口刑部少輔義廣の女を以て元信ふ妻す之ふ依て三河の將士皆來りて賀を伸ぶ是年の冬元信義元ふ請て曰某幼少より國を去り尾張駿河ふ流寓する數年願くバ一度故郷ふ歸り祖の墳墓を拜掃し且群下ふ威を示さんといふ。義元之を許しけれバ元信始めて岡崎ふ歸る事を得さり三河の臣僚等大いふ喜び拜謁する者門ふ充滿さり。同三年三月元信復駿河ふ往名を藏人元康と改む永祿元年正月義元が勸るふ因元康二月岡崎ふ還りて寺部廣瀬の両城を攻る。之元康軍初め。也同二年三月世子信康生る。此時義元威を遠近ふ震ひ四隣諸侯皆好みを需む。義元志氣驕慢尾濃近の三州を平けんと謀る。大軍を師ゐて先織田を滅さんと出陣す。元康も從ひ進む。時ふ年十八。五月義元信長と戰ひ織田が七箇所ふ築さる砦の中丸根ふ元康攻落し鷲津を朝比奈泰能責落せり。是ふ於て義元大ひふ驕て自身桶狹間ふ進て陣し勝を恃て備へを設けず。時ふ信長二千の兵を以て山路を取て不意ふ義元が旗本ふ斬入遁々暴風沙石を飛し雷雨俄ふ至り。義元の兵忙て散乱す。服部小平太毛利新助進んで義元を討取其首を大刀ふ貫き丹下戰場ふ至り大音ふ呼ハりれるふそ。駿河兵大ふ敗れて四方ふ逃走る。此時元康ハ大高ふ在息が。義元討ぜしと聞夜中徐ふ退き岡崎ふ皈城す。元康之より兵を發して。參州所々の城を攻落し。尾州ふ進む。此時信長西上して覇たらんと思ふ心有ハ。乃ち瀧川一益を參河ふ遣し石川數正ふ就て和を請ハしむ。元康將士と議す。酒井忠次之を勸め。元康諾して國界を定め。廣瀬舉母寺部の三城を織田ふ返し。戍兵を引揚て。元康信長對

再して和議盟約せ。今川氏實之を聞怒ふ堪へず。使ひを遣し元康を責む。酒井正親謝して說く之ふ氏実疑ひを解と云。同五年春元康名を家康と改む。九年十二月朝廷詔りして家康を從五位下ふ叙し三河守ふ任せら此頃甲斐國主武田信玄家康の威名盛成を聞好みを求め日頃ふ力を戮せて今川を亡し大井川以西を取我れ大井川以東を取以て隣好を修んと家康之を諾して共ふ盟ひを成たり

○家康氏實と和議の事
並ふ姉川合戰の事

永祿十一年正月家康左京太夫ふ任ず。二月家康久能宗能を降し。尋で松下二股高數を降す。



十二月家康兵を遠州ふ進め頭城を落す。此時信玄駿河ふ入て今川氏実を攻る。氏実逃て遠州掛川城ふ入。十二月春正月家康奏して德

川を宗氏とし松平を族とす。同月家康掛川城を攻る。城中食力盡て和を乞ふ。家康之を許す氏実北條氏康ふ倚る。元亀元年正月遠州平定引間を濱松と改め。家康此ゑ移り世子信康を岡崎ゑ遣す月信長越前の朝倉義景を伐。家康兵を起て之ふ加勢し利あり同年六月信長江州の淺井長政父子を討んと大軍を師ゐて進み。虎御前山ふ屯集して。小谷城市を燒然〳〵と本陣を龍の鼻ふ移す。時ふ家康江州ふ至て信長と會合す其翌日信長姉川ふ於て淺井朝倉が兵と戰ふ。此時家康朝倉の兵と戰爭而大ゐふ利なり。信長ハ坂井池田木下柴田明智等の將士を以て十三隊ふ備へ〻り淺井の勇將磯野丹波守其四陣を破り。信長が本陣ふ入んとす時ふ木下秀吉智計を以て。磯野と戰ひ追ひ返す。織田の諸將等之ふ力を得て俱ふ勇を震ひ激戰と爲す。淺井大ふ敗〳〵。小谷城中へ遁走す。雙方其討死負傷多〳〵。信長家康勝ふ乘て小谷ふ迫り竟ふ淺井父子を滅し信長大ゐふ家康が軍功を感美す。

○味方原合戰の事　並ふ信玄笛音を聽く事

從是以前ふ家康が異父弟久松敏勝武田ふ質〻りしが。暗ふ遁歸る信玄怒て家康と交を絶て亡さんと。元亀二年東三河を侵し松下二股高藪を招て小笠原長忠を攻るふ降らず。此時三河の諸城多〳〵叛て武田ふ應ず。信玄衆を會て岡崎を攻んとす。四月家康吉田ふ陣し之を迎へ擊〻り。三年十月信玄遠參二州を攻んと欲し北條ふ援兵を請氏政諾して兵を甲府ふ遣す。信玄此勢を合せ遠州多々良飯田を落て袋井ふ屯集す。時ふ家康濱松ふ在て本多忠勝內藤信成等を三賀野ふ遣し追却ぞけ〻忠勝大ゐふ烈戰して。敵一言坂の下迄退〻甲州勢又兩ふ分て慕ふ忠勝復之ふ向ふて働く味方一騎も討せず。小天龍迄引取ける。信玄又二股城を攻落し濱松ふ迫らんとす。家康即ち要路宇津山を守ら〻む。時ふ長臣信長の援を請給と勸を共家康聞ず諸臣重ねて諫む。漸く家康之ふ從ひ。則ち使を以て信長ふ告信長則ち佐久間瀧川平手等を以て援ハ〻む。斯て信玄味方が原ふ陣を取兵を山際ふ寄千餘列ふ備へ〻り。家康兵を出して戰ハ〻むるふ。信玄奇兵を以て三方より競ひ蔓る爲ふ家康が軍兵備へを乱し。散乱して大敗ふ及び信長が援兵も戰ハずして逃走平手ふ馬場が手ふ討取をぬ。依て家康濱松ふ引退く其夜大久保忠世天野景康二將請て。甲州勢の後ふ至て放火して鉄炮打蔓る。敵狼狽谷ふ落死る者多し翌日信玄濱松を攻んと議高坂燧ふ止む。從て北刑部ふ退陣す。翌天正元年正月將軍家信玄を論て和睦せ〻めんとす。信玄更ふ聽ず野田城を攻る。管沼定盈松平忠正等防戰成と雖ども。水竭且多危し。夜檐ふて曲を按る敵城外ふ之を聞竹を標として去鳥居參左衛門之を見て。

信玄笛の音を好めゞ必らず來るべしと推り翌日芋休ふ笛を吹しむ果して信玄笛の下ふ來り聽島居之を覘ひ定めて一發をせゞ悞ふず信玄が頰を貫落馬し陣ふ歸る。信玄大ふ憤怒て翌日城を攻落す。二月信玄創痛と甚ふ布守りを置て平谷ふ退きゝと家康兵を出して天方角輪等の五城を取返す。餘衆皆解散す。四月信玄平谷ふ卒す。死せる時諸士ふ喪を發べからずと告勝家等遺命を奉じて秘す依て信玄が死るを知者無しと云ふ。

○長篠合戰の事　并ふ家康甲信二國を得る事

天正二年正月家康正五位上ふ叙を同年六月武田勝頼高天神城を攻て小笠原長忠を降らす。三月家康獵ふ出其途中ふて井伊直政を見て命じて仕へしめ其舊邑井伊谷を與ふ。同月長篠の城を奥平信昌ふ與へ松平伊昌を以て助しめ甲州の要路ふ當守らしむ。同四月勝頼遂ふ信玄の喪を發す。五月朔日勝頼分國の勢を催し長篠の城を攻る。信昌伊昌衆を勵し之を防ぐ。十一日城兵門を開き出て奮戰す。寄手大敗逃走せり十三日勝頼下知して城ふ上らしめ三日三夜息を也繼せず責立る。信昌等必死と成て防と雖も城中粮乏く成信昌曰く誰か城を出て援兵を促す者有ん哉と鳥居强右衛門之を勤可しと云夜中忍出て岡崎ふ至り城中の艱難を演援兵を請ふ家康之を聞今信長の援兵途ふ有り吾又明日進發せん汝も共ふ從ふべしと云を鳥居可ち即夜馳歸るふ敵兵を見咎ふを遂ふ擒ふる十七日家康の兵進んで高松ふ陣を取り信長の兵か設樂ふ陣を勝頼此時老臣の諫を入れ兵を分ち高坂小山田ふ長篠を當らせ武田信実ふ鳶巣山を守らせ自ら兵を師て瀧澤川ふ進みて川を渡り陣を取其後家康信長卒ふ責立突入り甲州勢之れを對へて雙方大ねに烈戰す時ふ長篠の城兵も突て出戰ひ嗚んで切立る甲州勢ハ夾み擊を四度路ふ成りて大敗せり。此時の戰ひ五十八合ふ及べり。家康信長ふ説ふ此大勝ふ乘じ追擊せば甲信二州を一舉ふ得べしと云歡を共信長諾せり。依て家康凱陣せらる。八年家康從四位上ふ進む。十年正月家康遂ふ信長と議して武田を伐と約し二月兵を出して屢々戰ひ勝頼竟ふ天目山ふ討死を信長其首を見て躊躇家康ハ愁然として礼を加へ且屍を索て葬す。甲信の人民之れを聞皆心を家康ふ傾けしる。後甲信二國を得且駿河を領す同四月家康小勢を師ゐ泉界府ふ赴むく是月九日信長近臣百餘名と具し京ふ入本能寺ふ宿す信忠妙覺寺ふ宿す。八月二月光秀織田父子の旅館を圍を火を放つて父子自殺を家康之を界府ふて聞逆賊光秀を誅せんと怒る本田忠勝諫を據國す同月十三日秀吉巳ふ毛利と和議を行ひ馳ふて光秀と山崎ふ大ふ戰ひ誅す十一年秀吉柳瀬賤嶽柴田勢を大ふ破り遂ふ北庄ふ

迫る勝家敗して自殺す又大垣の城を攻七月北條氏政家康の女を迎ふ八月家康信州上田城を直田昌幸に與ふ十一月秀吉大坂城を築づく宏大壮觀にして衆天下第一と賞す

○小牧長湫合戰の事　并に秀吉家康と誓を結ふ事

天正十二年正月家康參議從三位叙任織田信雄秀吉と絶交して戰ひ家康に援を請ひて助力す三月信雄小牧山に陣し秀吉の前隊丸に據後隊羽黑に陣す家康の兵羽黑の陣を破る此日家康康政に小牧を守せ信雄と清洲に入同九一日秀吉大軍を師ゐ小牧に對て柵を起す家康戰ハず檄文を遣る四月五日池田信輝數々秀吉を說て岡崎を攻さしむ家康酒井石川に小牧を守せ自ら敵の後に付て進む池田が勢ハ岩崎を拔勢ひに乘じ岡崎を進擊す康政忠重兵を率て稻葉に至り秀次の兵を大に破る時に家康信雄長湫に至て奮戰す秀吉ハ大に敗せり其後小牧長湫に合戰す五月朔日秀吉大垣に敗り家康六日に清洲に入ル信雄も長島に帰をとり十一月秀吉信雄と桑名に於て和議す秀吉家康に和議を需ひ其使數度に及び家康靳く從ひ庶子荻丸を遣す時に十一後に羽柴秀康と呼十三年秀吉関白に任す同十一月岡崎城代石川數正大坂に馳る秀吉家康と氏政と結東海に有を患ひ信雄に因家康に盟を求め參覲を請しめ共諾せ

す十四年正月秀吉復家康に參覲を請共聽ず怒て使を殺す使還て告に秀吉怒ず時に家康室没し未繼ず二月秀吉異母妹を以家康に聘を求む家康則ち二事を約して許す三月家康北條と會し益々親む四月秀吉妹を濱松に送家康婚姻全く整ふ十月家康中納言に進む秀吉奏し請を以也是に於家康上洛して秀吉に見ゆ十一月二日秀吉聚樂に家康を招き諸侯と會合せしむ同三日秀長家康を饗す十二月秀吉太政大臣に任ず此月家康駿府に移る十五年二月秀吉大學して嶋津を征す八月家康從二位大納言に叙任

○小田原征伐の事　并に奥州動亂の事

天正十六年五月秀吉使を遣し北條氏政に不廷を責て參覲を命ず氏政答を誓を結ひ質を得と爲に有八月氏政之を秀吉に請秀吉の曰く久しく參覲せざる罪大也然と入朝されかし其望を得さしめんと云北條其後自ら入朝せず十二月秀吉朝廷に奏して大軍を師て北條を征せんと兵を募集す時に家康其先鋒さす十八年正月家康か大人豊臣氏京師に卒す同月家康世子長丸を京に遣し質とす秀吉之を送敬す時に識の一字を與へ秀忠と名す三月家康兵を發す北條田上杉等繼で進み秀吉も毛利を京に留秀長に大坂を衛せ兵十七万を率て関東に赴き而して北條と數度戰事に及び小田

原に迫る時に秀吉羽柴勝政を使者として氏政氏直に和議を勧めしむ氏政之を聞き氏直に家康に降る是氏政を誅し氏直以下を高野山へ放逐す斯て家康に北條の故地関八州に封し近江九万石を附其他諸侯皆褒賞あり是月家康江戸に移り群臣を賞す秀吉伊達政宗に米澤長井を賜ひ蒲生氏郷に會津仙臺を賜へり然るに政宗故地を削らるゝを樂まず奥羽上民を煽動して乱を成さしむ十九年八月秀吉之を征す十月に至り乱全く平治して軍を收む

○朝鮮征伐の事、並に秀吉遺命の事

文祿四年秀吉海内の兵五十萬を募て肥前名古屋に會し加藤清正を先鋒とし小西行長を二陣とし大友黒田島津毛利福島長曾我部小早川浮田等を朝鮮に遣つかす四月十三日釜山に着す是より八道に進入して所々を征す七月に至り明國朝鮮に援兵を出す九月を累て勝敗決せず時に秀吉國家を家康に守らせ自身新田蒲生を具し十方を師て征韓せんとす家康悦び我老と雖も何ぞ國に居ん哉進て國威を俱に輝かさんと云淺野長政家康に謂大間近狐野の憑が如し公竟に掛る事勿れと云秀吉大に怒て長政を斬んとす秋家氏郷進んで之を止む同年九月秀忠中納言に任ず二年三月江戸城の土功全く竣る秀吉の季妃淀君棄丸を生後ち長ずして秀頼と改む十月家康江戸に還る此月藤原惺窩を聘して治道を諮問す三年二月家康大坂に往秀吉家康を京師に待て俱に吉野に觀花す此時関白秀次淫虐暴戻にして人を殺し樂む老臣之を諫め共聽ず石田三成潛に異心を抱て諂奏屢々止む四年三月秀吉伏見城に移る七月秀吉秀次の官爵を削り高野に放ち猶死を賜ふ九月秀吉淀君の妹を秀忠に配偶此年強盗石川五右衛門を刑に行ふ慶長元年家康正二位内大臣に叙任六月朝鮮渡海の諸將凱陣す七月大地震八月明朝使節伏見に至る秀吉韓使の微賤成と怒て見ず九月二日秀吉明使を見る其封冊の文中に汝を封じて日本國王と爲の語有けるを秀吉大に怒て明韓二使を逐返し再び大兵を募る二年二月小早川を征韓元帥として黒田を輔とし加藤小西を先鋒と成て朝鮮に入しむ六月秀吉疾病發し医藥其効なし因て五奉行を召て曰く列藩諸侯我都臣と隙を生じ讐を構ふる由を聞我死る後禍ひの起事有んぬ汝等其間に居て之を和解し共に吾兒を輔翼せよと同十六日五奉行に大列侯守令諸士會して秀吉の命を傳ければ衆士曰く殿下千秋の後當に心を同うし力を戮せ嗣君を奉而異志有事無し但し宿怨を解に至ては敢命を奉ずと云秀吉之を患ひ家康を以て傳へしむ家康懇々説諭され共衆答る事初めの如し家康大に怒て八等已に異志あるを以て心を戮て嗣君を奉ぜんと言るが又宿怨を解ずと云是嗣君を奉ずる義

安ふ在哉と云を愚が衆皆惧れ謹んで命を奉ぜんと云ふぞ秀吉大ふ喜ぶ。其後秀吉家康を召て曰く。昨日の事公ふ非して孰か能之を辨ぜん吾兒幼成と雖も後事又慮かるふ足ぞ。公之を撫育し以て天下を鎮靖せよと云。二十二日外征諸將眩る秀吉之を召見す七月秀吉病益々危篤ふ至即ち家康を召て孤を拖して曰く。今吾天下を以て公ふ讓らんと。公宜く心力を竭て太平を致べし。秀頼成長の後立て立べからざると。公幸ひふ慰置せよと云。家康固辭して退出す。秀吉遂ふ德川家康前田利家毛利輝元浮田秀家上杉景勝を以て五大老とし。小事ハ五奉行行ひ大事ハ五大老之を論し大老奉行執処同じからずと定め。又中老を置。厅桐且元を秀頼の傅とす。八月五日秀吉諸老を置の非を悟り家康ふ云るハ公固辭するを以て大計を誤る公其諸人ふ冠として大政を統轄して國家を靖せよと遂ふ之を重臣宿將ふ告嗣子を拖す故ふ各々異心なき爲の誓約を爲しを同十八日秀吉遺命して申利家大城ふ居て幼児を護り家康ハ此ふ在て大政を秉又淺野石田ハ名古屋ふ至り征韓兵を悉皆還さしめよと命じ已ふして侍臣皆らく喪を秘して發せる事勿と言了つて薨ず。年六十三阿弥陀峯ふ葬せ

○関ケ原合戰の事　並ふ賞罰を行ふふ事

三年九月太閤の遺命ふ因り淺野長政石田三成名古屋ふ往十月征韓師を還しむ。此頃三成徴て企つ陰謀を此舉ふ乘じ發せんと思ふ。德川前田を不和ふ爲ずんバと謀り一味成増田長盛ハ家康ふ諂ひ三成ハ利家ふ媚て中を裂と巧を一日利家家康を饗應せんと請家康諾し已期定るを長盛告て曰公必ず往事勿を前田公を圖ん結搆成と云依て家康疾有と云辞す此の如成事再三ふ及び利家怒て細川忠興ふ曰吾老て人の侮慢を受事此の如我既國を可しと云忠興之を頻ふ諫止む是より家康利家不和と成る

四年正月家康伏見城ふ在て諸老と議征韓の功を賞す同十日利家秀頼を守護して大坂城ふ徙る十九日家康有馬邸ふ乱舞を觀時伏見城下反者有と叫び騒動す井伊等堂等驚き家康を扶出る関東の士ハ匆論在京の人民迫來て德川邸を護事數日ふして罷是より先伊達福島蜂須賀三家の婚を家康允諾する後紛擾を發り遂ふ黨を分て相軋轢ふ因幾旬恂々くり黒田福島池田藤堂等ハ家康ふ心を飫し加藤両家細川京極織田長益蜂須賀森有馬金森山岡等ハ昼夜來て家康を護る然ふ三成異圖益々急ふして屢々家康を攻と爲其議行れを時ふ堀尾之を患ひ中村生駒等と謀り井伊ふ因て家康を請又四大老と告和解しなり同廿九日利家疾を助て伏見ふ來り家康ハ盟約を謝す。家康大悦待遇殊ふ厚し。三月十一日家康大坂ふ至利家病を力て來を謝す。利家悦ひ對面し我死ん事且々ふ迫る公宜く嗣君を補異せらるべしと云饗宴を設く其夜家康藤堂が

邸に宿す石田が黨之を暗殺せんと爲共決議せず家康恙なく伏見に返る三成又討て伏見の邸を襲撃せんと謀共守衛嚴重ふ一て發難く此時加藤清正同嘉明福島浅野細川黒田の七將連署一て石田ゞ罪狀を數へ三成を賜ん事を請共家康許さず依て七將又利家ふ請之を許さず七將悅ハ之を潛ず兵を以て攻んと准備を閏月三日前田大納言利家卒る時ふ毛利浮田上杉嶋津佐竹の五侯ハ三成と睦ゝ見ハ三成浮田秀家士を遣ゝ守ゝむ此ふ佐竹ハ三成ふ告ふ七將已意を決せハ容易赦べからず之を制る者ハ德川内府耳と云因て三成即ち女裝一て伏見ふ至り家康を拖む七將之を聞怒て伏見ふ至三成を誅兵を各邸ふ集て命を待家康之を患ひ人を遣ゝ七將を諭さしめ且三成ふ曰子今此難を避と欲せハ一旦職を解て國ふ蟄居一後又時を計再勤せよと三成命を拜謝る家康七將ふ許へ此旨を通る七將皆承諾の旨を答ふ家康喜ひ即ち三成を佐和山ふ送しむ六月家康邸より伏見城ふ移り大政を秉七月征韓の諸將人心稍平穩成を以告告て國ふ歸ふ上杉景勝歸國の時三成等と謀計を合せ我本國ふ於て事を擧ふハ家康必ず東下せん其時足下嗣君を奉一て毛利以下西國の諸侯と其後へふ起て前後より家康を擊討んと約る而一て景勝城を修覆一國境守備を嚴ふる三成ハ潛ふ日夜軍事外他事なゝ斯て上杉會津ふ據友る由注進櫛齒を挽ゲ如ゝ家康驚き五年二月大谷增田を以て景勝を諭一參覲を勸共命を奉ぜず家康猶無事を圖んと思伊奈圖書を以て再び景勝を諭と雖も却て家康の命ふ背十條を擧て服す氣色ふ一家康大ふ怒て五月遂ふ會津征討ふ決し十一日諸將の向処を定め十五日家康大坂を發し七月二日江戸ふ着す時ふ來り會ずる東西ハ諸將數百名兵士都て五万五千餘人也此時大谷吉隆東軍ふ加らんと進む序ふ舊友成ハ三成ふ對面せんと佐和山ふ至り三成喜悅閑処ふ誘ひ密謀を告助力を請吉隆驚其不可成を辨し見共更ふ聽ず反て強急吉隆再三諫ゞど聽を容ず故辭して垂井ふ帰しゝ思惟して交誼の深さを懷ひ遂ふ悪と知て意を決し同心す同十日三成吉隆大坂ふ赴き增田等と議して西國諸侯へ檄文を傳へ兵を徵す是ふ依て毛利輝元兵を帥ひ大坂ふ來る三成悅び盟主と爲す繼で浮田嶋津立花鍋嶋小西長曾我部を始め大小の諸侯大坂ふ會ずる者四十四名在國應援ふる者世六國益々兵を諸道ふ募歩騎惣て十五万と云ふ十四日三成大坂の留主佐野正吉ふ逼て去しめ又伏見の留主鳥井元忠を諭すと雖も聽ず元忠即ち關東へ人を馳大坂の擧動を告て四門を守城兵僅二千餘ゝ二十日浮田秀家四万の兵を率て伏見城を攻め元忠固く守て戰ハず同廿四日家康軍を進め小山ふ陣を此日上方變注進有ふぞ諸將大ふ驚愕騷ぐ家康諸將を召て議し同廿五日家康諸將を集て曰三成奸謀一日

ふ非を西國の諸將皆惑さる景勝も同謀成ん彼ハ秀頼の口を藉其上諸君皆賞を大坂ふ置ハ三成ふ與せん

㊀頗る烈く東軍大勝利を得十七日ふ佐和山城を陥入此月大城守將等敗を聽城を開て降る十八日家康驍逮捕令ふ石田小西を縛し來る九月家康大津ふ至て共勿辛忠陣ふ往共家康怒て遇ふ九三日漸く意解對㊁

と欲る者ハ宣く陣を拂て去べしと云諸將辭を出る者也時ふ福島進て曰事此至る誰か妻子を顧みんや正則死を以て ふ從ん と云ハ一座諸將皆同じ家康喜び結城秀康を宇都宮ふ留て景勝の備と兵を二手ふ分家康ハ東海道を進み秀忠ハ中仙道ふ攻上る八月一日伏見落城元忠討死ス同十一日石田浮田等大兵を帥て美濃ふ入西國諸軍相次て之ふ會ス其勢凡そ十八万と云十三日東軍の先鋒清洲ふ着し二十二日東軍岐阜を攻秀信降て高野山ふ入東軍三成を追ふ敗而大垣ふ入九月朔日家康江戸出馬同二日秀忠信州ふ至上田ふ入を遭て真田幸村を招く幸村父昌幸西軍ふ應じ大坂ふ至ハ秀忠の西上を妨ぐ万事數日秀忠已を得ス仙石を之ふ備へ岐阜ふ至同十一日家康清洲ふ着し諸軍を聚秀忠ハ軍の來るを待ふ來らス依て家康赤坂ふ進ん而して關ヶ原ふ西陣と戰ふ同十五日辰の刻る申刻ふ至り双方戰㊀

四顔有り

朔日三成行長安國寺を六條河原ふ斬長束の首を併三條河原ふ梟し降參の將士の處分を已十二月禍亂粗定まるを以家康赤坂を出て諸將の功を論じて賞を

行ひ又摂津河内和泉の三國六十餘万石を以大坂の領分とす。六年三月京都二條の城を築く。是月秀頼秀忠従二位大納言に昇る。六月上杉の事既に平ぎ景勝竟に降る。家康會津を没収而米澤を賜ふ。八月家康生母水野氏卒す。小石川に葬し傳通院と謚して寺を建る。十月家康五男信吉水戸に移る。其舊領佐倉へ六男忠輝徙る。八年正月七男義直を甲府に封じ二月忠輝川中島の城に移せり。

○德川家康將軍宣下の事　光に朝鮮人來朝

慶長八年二月十二日後陽成天皇詔りを下し德川家康を以征夷大將軍に任じ右大臣に遷し淳和・奨學兩院の別當源氏の長者に補せらる。隨身兵仗を玉ひ牛車宮入を聽さる。同月五日家康入朝して命を拜す。儀衛甚だ盛んなり。天皇亦酒肴を賜ひて曰天下亂れて久し。汝能朕を輔け泰平の基を開け。將軍の勲功朕甚だ嘉す。益々文武の德を敷き邦家の光を爲せと宣へば家康答へて曰老臣不敏なれども敢て天子の休命を奉揚せんと。白金一万兩を獻じ皇后皇太子皇妃及び百官へも各獻物有り。礼了て退出せんとす。公卿諸侯等二條城に至て賀す。三月西國の諸侯江戸に參覲す。四月秀頼内大臣に任ず。年已に十一。成に將軍の孫女を以配遇大久保忠隣を遣て大坂に送しめ婚姻を女時に七歲なれども秀頼の妻の待遇無淀君の愛と思はず。密に福島正則をして西國諸侯の誓書を徵さしむ。十月家康右大臣を辞す。十一月秀忠右近衛大將右馬寮御監に補任。九年七月秀忠の夫人家光を生む。宗義智朝鮮使節孫文彧等を率て京師に入る。十年正月將軍京師に入る。二月朝鮮使を伏見城に召て囚人を返す。且示後貢使江戸に至ることを命ぜらる。同月秀忠上洛入朝して右大將の命を拜す。四月家康上表して將軍職を辞す。從是世前の大將軍と號し大御所と呼ぶ。

○秀忠將軍宣下　并に琉球征伐の事

慶長十年四月豊臣秀頼右大臣に任じ德川秀忠内大臣に遷し征夷大將軍に任じ淳和・奨學兩院の別當源氏長者其右近衛大將右馬寮御監故の如く牛車兵仗を賜ふ。依て秀忠參内して命を拜せらる。其儀式家康拜命の時の如し。五月家康秀頼を論て參内せしめんと爲す。淀君性邪推深く秀頼の身に誤ち有ん事を怖て肯て從はざるに人心始めて動揺す。十二年家康駿府に至り新築を賀す。秀頼も使者を以て賀せしむ。十四年三月島津家久幕府の命を受け其將新納樺山等に兵八千を添て琉球を討しむ。初め天正中琉球王屢々貢ぎを納て交易を請へり。文禄中正韓の議起るに及び琉球王秀吉の意を失ひ恐れて來らず。家康海内無事蠻夷賓服せるを以て薩人をして屢々之を招かしむと雖も吏に來らずに依て家康其罪を問んと請もへ遂に此挙に及べり。斯て薩兵琉球を責め國王始め諸王子等を擒にし今を下し劫掠を禁じ戍兵を置て歸る。秀忠其功を賞して琉球

を家入に賜ふ。十六年三月家康上洛し織田長益をして秀頼を促し來り見へしむ。時に秀頼年十九成共未だ童心失せず放逸にして大小事皆淀君決す淀君性疑ひ深く變を恐れ聽ざれば群臣諫むれども然と淀君許されず依て清正進んで曰。右府は寛仁豁達成は決て他なきを信ず若萬一事有ば臣幸長と共に死を以て君を護るべしと云淀君漸く之に從ふ同廿七日後水尾天皇即位ぬ。同廿八日秀頼加藤淺野等を率て京に至れば家康子息義直頼宣を以て迎二條城に饗應す清正幸長は秀頼の傍を離れず饗終りて家康を辞し大坂に帰る。十一月藩國入貢して互市する者廿餘國に至る依て長崎を互市場と定む

○大坂合戦冬陣の事　并豊臣徳川和議の事

慶長十九年三月大坂城天守閣より黒氣俄然として昇る城外に在居の諸士狼煙成と思ひ蒐集る城内に輩ち驚き天守に登れば黒氣散乱而靡きぬ。大坂城には秀頼已に長ずるを以て兵を挙んと欲る時に大野治長私に淀君と通じ因て大野父子が威權頗る一城を傾くる勢ひ有て議を挾後に托し日夜淀君と謀り関東の動静を伺ふ。四月使者に書を持せ前田利長に言る右府已長に為は來て舊職に就き尽力を頼と。利長疾と称し之を辞て其書を駿府に達す。此月利長卒す。五月方廣寺大佛殿落成巨鐘を鑄其銘を僧清韓に作らしむ。銘中國家安康の文有家康其原稿を看大に怒り銘は我名を両段とし秀頼我を調伏すること咎め急使を馳所司代板倉勝重に命じ大佛供養執行ふ処を止む。勝元大に驚き調伏の文有抔は意表に出御難題也修行あして後駿府公御怒有は勝元切腹仕べしと云に勝重聽て是非なく供養を中止す。其後大坂城中には評議有て難題詳解の為片桐大野駿州に赴き鞠子驛へ着し本田方へ之を報じ家康登城を禁じ日經て本多安藤の両士を且元の旅宿へ遣し大佛鐘銘を難論す。且元悉皆々之を明瞭に解両士唯々として去。其後何れ沙汰も無而光陰送る治長悶へて一書を捧て返辞を促せに家康秀頼の隠謀数條を並べ差さば返答あし。治長之を大に怕る又日を經て後本多をして家康云しむるに両士當地に滞在して大坂は憲法は誰が正すやと。治長之を幸ひとして大坂に帰り駿府表は始終を言上す。秀頼淀君大に驚き淀君が計ひにて十九日大蔵正榮二位は三人の局を卒に駿府に遣し言分せしむ。家康三女に對面而曰。大坂近日浪士を抱へ叛逆の兆有り何れ奸人の為に誤りに成ん速に浪士を追拂ひ武器を收めは國家無事成べしとて汝等之を諫べしと出立せんと為処に本多正純僧天海來て且元を留て云く調伏は謝は免せと大坂諸臣叛逆の企て日々急成は殆と右府の禍ひと成ん足下今何の策略有て右府を保護し赤

心を顕さやと。且元之を教よと。云二人の曰是足下の方寸に有ば疾飯思慮を運すべ〜と云且元心得て暇を告發足爲〜土山に出て三女に遇ければ且元の曰駿府公我に逼り右府異心あさ證を顕せとの事也我其意を察すほに大坂城を開き他國へ移るら親姻を托〜右府東行を煩はさら。姉妹は親みを言立假に母堂を関東へ人質に出すは三條の外に非すと云同道〜て京師に至る三女等飯坂を急き且元に先立飯て且元反心〜て関東に属御母堂を質に受合剰さへ本多と誓を結び〜と談奏す。淀君大に怒て且元飯ハ首刎て後來を戒を可と罵り給ふ。廿五日且元飯坂登城をれば淀君且元を白眼て妾ハ大閤の側室成と雖も右府が生母ん臣の躬と〜上を軽〜め妾を人質に出さんと計又本多と私誓成人面獣心早く彼ら首刎よと怒ける。且元謹んて答るに是一を聴て二を知〜召ぬ御事ん之深き遠謀有て君の御大事に候へば密々御聽下されと述共淀君聞入氣色無礼ば且元憤を忍び三策を建言成右は内速に御返答成されしと云捨て下城〜大に歎息〜て俄に茨木へ退去せり。是より先秀頼益々兵を募見ハ関ケ原の殘黨並に四方亡名の士此召募を聞先を爭ふて大坂に馳集る者無慮六万餘騎然ば城兵等濠を鑿柵を設け諸川を堰止大沼と成壘を高く〜て樓櫓を作り所々に砦を築き守衛を嚴し元帥真田幸村堀月城を築て之を守る十月大坂の變報関東へ聞は齒槌

が如く成ハ家康秀忠其准備を成て藤堂井伊を先鋒と定め大坂へ進ましむ繼て家康兵を率て駿府を發〜秀忠も兵を帥ひて出馬す其勢總て廿万と云德川父子廿四日京師に會〜て十一月東軍先鋒大坂に進〜七日家康進んて住吉に陣を布秀忠ハ平野に陣す。此時四方に屯集を軍勢都て五十万とそ。廿一日家康城内に和議を勸れ井聽ず依て遂に進擊に及ひ上杉鳴野に城兵と戰ひ佐竹今福より進む木村後藤之と交戰東軍敗を蜂須賀嶽多崎に砦を陷す。是等の合戰は初と〜て所々に撃戰數回に及ひ真田等計を以て東軍を惱ましい事屢々に而死傷多家康秀忠危險成事度々なり然共父子恙なく十二月朔日家康金工光次を城中に遣し和を議せ〜むほに諾せず。四日東軍出丸を責るに幸村ば謀計に陷入大敗討るゝ者多し。日を經て天皇敕使を大坂に下し。終に和議を成事に及ぶ。時に家康常光院を以て三條は望を城中に示す秀頼又望と有双方約諾〜神文を取換す。德川ハ板倉重昌を城中に遣〜誓紙を受取豊臣ハ木村重成を茶臼山の本陣に遣ハ〜て誓紙を受け取時に重成誓紙に意血判は薄さを咎む家康面前に更る書〜て渡す重成受取拜謝〜て飯る。廿三日東軍圍みを解且約定は如く大坂城外堀を悉皆埋みゝり

○大坂合戰其陣の事　并豊臣氏滅亡

元和元年三月三日家康凱旋して京師を發し駿府に歸り十九日秀忠入京して駕を駐る事十日に後東下して二月江戸に歸る。大坂城には真田後藤木村等を始め將師と為る者秀頼母子を勸め再び兵を起さんとす然共淀君安逸を好み許さず。幸村等城中に異變有ん事を慮り急に事を舉と秀頼母子に迫て畿内に軍を起んとす大野是を不可成と云関東に使を遣り賑給義を乞其後事を圖んには迎聽を幸村は云先んずれば人を制し後る時は人に制せらる日を過ば失策有んと云ふに淀君大野が言を善とし。三月青木一重及び大藏正榮は二女を東下せしむ。使駿府に至り本多正信に就て家康に謁し一重君命を述賑給を請家康聞て使者に起き諾をと答又両女に下向を幸ひ頼べき一事有今度宰相義直に淺野が女を娶る吾行て其婚姻式を見とす尚禮法を辨へ者少き依て吾汝等を伴ひ規式指揮を乞し婚終は吾京師に往賑給は事を取計ふ可と云両女一重共尾州に赴き婚終て両女飯坂し一重は尾州に殘る。其後関東返答無れば淀君大野等大に悔み急に遠近に兵を募に新旧合て十五万の兵と成是より諸將軍略を議し近國を攻る家康之を聞常光院を大坂に遣し兵を弭ん事を諭さしむ淀君怒て之を追ふ。四月十八日家康京師に着し廿二日秀忠入京し諸軍は向ふ処を定め大和と和泉より大坂に進入しむ五月五日家康秀忠同時に京伏見より出馬有て家康は星田秀忠は角南に其日は宿陣せらる去程に大坂方には後藤は平野に出陣して國府峠の東軍を討んと五日は夜に進む。六日の曉大野治長は基次が兵を助んと平野へ出軍し真田幸村は道明寺に出木村重成は若江に出長曽我部盛親は八尾に出る此日國分若江八尾道明寺等に於て交戰頻る烈敷して木村重成若江に討死し其他城兵討る者数知す関東方にも死傷多く城將等は利有をして城中へ引退きぬ。同七日の朱明幸村等は茶臼山に陣を取森竹田は天王寺は南に陣す郡は其後は抑へ大野は七隊長と毘沙門池に出治房御宿政友と岡山に陣し其後備へ總軍整々として待縣ふり斯て東軍家康が指揮に從ひ手配を家康は人質に大野治徳に書を作せ其兄治長へ贈しむ。時に秀忠騎馬にて小勢を率ひ陣を巡ちる城方には大野治長諸隊を廻り茶臼山に至り鬼は幸村の云く天下は事今日に決す宜く主君の出馬を促せよ出陣あれば軍氣自然倍すと。治長城に帰に秀頼に出陣せんとす。將士踊り上て待処に治徳の書至りて城中内應者有り右府出陣を俟て事を舉は文あり治長之を危み恐て出馬を止め幸村に急之を告已に東軍は先鋒茶臼山に迫る依て幸村是に戰かひを始め東西將士火花を散て激戰數合に及び幸村利を失ふて終に討死す享年四十六惜て元和元年死せしが城兵は大に乱れ名を惜む勇士等は此彼処に討死し或は城に逃入或討れ虜と成

時に秀頼打て出て戰
死と決し共敗兵路に
充満て戰ふ可らさ
依て城に引入処へ
東軍進んで乘入ん
と失く此時城中
に放火する者有
り其火延て殿守を
焼城兵之に倍々乱
て防戰する者も
寄手の大軍諸門を
破乱入る是に於て城兵討
るゝ者夥しく秀頼本
丸に籠る秀頼の夫人徳川
氏は侍女に助られて城を

(一)に収めて軍神を祭り
翌九日凱旋して伏見
に至り諸將は爭ふて
殘黨を捕へ獻す斯
て城内に焼殘る
処の金二万八
千枚銀廿
四万両
を得て
金馬千
枚に當
もの
伊井

出る東軍は猶進んで
本丸を圍む秀頼は曰
此に至るは天命なりと
て自殺して冦を年
廿三継て淀君も自
害し本丸に籠りし將
士皆殉死して婦女の
死を免れ多し終に大坂
落城して豊臣氏滅亡す。
東軍諸將は家康の本營に
來つて勝軍を賀し之り即
日家康俄に駕を命じ京師に
入る秀忠は諸將に命じ四門を
守らせ且西面四道は人夫を留めて
城は焼跡を修繕せしめ尾を岡山(一)

直孝藤堂高虎は二人に賜ひて軍功を賞せられ。六月に至り大坂城松平忠明に賜ひ十万石を與へられしより

○家康薨去の事　并に福嶋正則斷絶

五月十五日家康参内而事は平ぎしを告白金千両を献ず。同廿八日將軍二條に來り賞罰を議して行ひ。閏六月廿一日秀忠参朝白金萬両を献じ朝廷は儀式廢れるを補す。七月武家の諸法十三條を頒布す。又家康関白昭實と議し禁中并に公家諸法度十七條を奏す。八月豊臣氏已に亡びゝるを以て詔りして豊國の廟を毀ゝせり。此月秀忠江戸に飯城し家康駿府に還る。元和二年正月諸侯諸士年賀に衣冠を着せを定む。同廿二日家康駿州田中に狩し其夜より不例。秀忠之を聞駿府に至り晝夜傍らに離れ省病せらる。三月勅使駿府に下向し家康に太政大臣は官を授く。家康病を扶け衣冠を具て勅旨を拜す。四月家康病ひ倍々篤十四日悉皆諸侯の來る者を召て遺言して曰我命已に且に迫る然るに身幸に泰平を致す秀忠大政を執も我死の後或は政事を失ひ海内心を離ば侯伯の中にも其器に當者を擇み代て天下權柄を執べし天下一人の天下に非ず。とて遺物を頒ち賜ふ又將軍を召て曰吾已に諸大名に告ぐ興廢の道を以てせり汝心を政事に留少も私曲有るべからざるかを。又家光を召て汝他日天下を治る者あり天

下を治の要は唯慈の一字に有り汝心に銘し忘る事勿れと又義直頼宣頼房を召て汝等善將軍に事ふ可し遺言して同十七日遂に薨ず。享年七十五。遺命に依て駿州久能山に神葬す。五月青山内藤酒井を老中とす。六月本田正信卒す。年七十九。正信奉仕殆と五十年政事を執事十七年。此月將軍遺命に因野州日光山に新廟を建る。同三年勅して家康に東照大權現の號を賜ふ。四月十六日秀忠自身日光に往て改葬式を行ふ。勅使神號を賜ひ正一位を贈る。宣命を讀参議奉幣新に祀典を行ふ。儀式最隆盛。六月秀忠上洛入朝。八月上皇崩ず。四年江城中紅葉山に東照宮を建る。五年五月秀忠入朝。從是先福島正則驕横多く東吏伊南圖書を殺し又大坂の役起るに及び大野真田と牒し陰に兵粮を贈る其罪許る後益々驕横にして家政苛酷之に依て封を奪ひ流罪に處す。十二月淺野長晟を福島が旧封安藝に移し。中納言頼宣を紀伊に移す。是より尾張紀伊水戸を三家と称す。六年正月家光正三位權大納言に叙任。六月秀忠の女を女御に備ふ。後中宮に進む。八年四月秀忠家光日光社参す。此月宇都宮城主本多正純不軌を圖る事露顕て封を没収流に處す。

○家光將軍宣下　并に伊賀越仇討は事

元和九年六月將軍秀忠京師に入朝し職を辞するを議ありより朝廷之を許し。七月廿日

源家光を以て征夷大將軍に拜し正二位に進め内大臣に任じ兼官故の如し同廿八日秀忠家光參内して命を拜し九月二日江戸に歸る十月朔日家光天下の諸侯を召て始めて君臣の礼を行ひ各々佩刀を賜ふて盟を爲す。諸侯之を仰ぐ事鬼神の如し是月家光鷹司信房の女を娶る是より先越前參議忠直大坂の役に功を負ふ數々法を守らず或ハ酒色を縱まゝにし或ハ不辜を殺す幕府密旨を以て諭せども更に改めず之に依て是月遂に豊後の萩原に放ち其弟忠昌を入て宗家を繼しめ越前三十二万石を賜ふ。

寛永元年二月寛永と改元す四月京師所司代板倉勝重卒す年八十勝重職に有事三十年皆其德を稱す六月弓氣田七之助秋田長門守を江戸の城内に殺して自殺す。同二年秀忠家光入朝八月秀忠太政大臣家光右大臣に昇る。義直賴宣忠長等權大納言に進み前田伊達島津始め諸侯任官す。九月二條に城へ行幸有り。十月僧天海を以て東叡山を建る。五年家光微行して番町角力を觀青山忠俊之を諫む。六年十一月天皇位を皇女に禪る。九年正月秀忠病發して二十四日に薨す。壽五十四芝增上寺に葬る。天皇正一位を贈り台德院と謚號す。九月駿河大納言忠長を甲府に蟄居せしむ。十年筑前黑田忠之其家老栗山大膳と訴訟す大膳南部に放ふる。十一年六月家光上洛其從者世万餘前代未聞家光從一位左大臣に叙任院に供御料を增京師町人に銀五千貫目を賜ふ十一月伊賀上野に於て備前岡山藩臣渡邊數馬同僚河合又五郎を殺し弟小才治が仇を復せり是と伊賀越の仇討と云其初又五郎が父半左衛門安藤の家士にして同藩士と口論し其對手を殺し逃て渡邊に寄る數馬河合父子を憐み推舉して家士と成然る又五郎數馬が弟と爭ひ生ゝ討て脫走し計策を以て父を奪ひ又數馬無念に思ひ姉婿荒木又右衛門と共に弟の仇を復せんと探索の中妻五年遂に本意を達し其吉藤堂家へ届け出た。

○天草騷動の夏　並に家光薨去の夏

寛永十四年小西の遺臣蘆塚忠右衛門等天主教を奉ぜし天草人民を煽動し天草四郎時貞を擁して亂を作し島原城を犯て米穀火藥甲馬を掠め原の故城に築て衆四万餘を聚め尚兵を募る。依て島原の松倉氏唐津の寺澤氏兩侯より關東に急使を馳て告る將軍驚き即ち板倉重昌を追討使として西國諸侯と共に賊を討しむ諸將等十一月十日江戸を發し同廿九日島原に着陣島原の城を征る。然に賊勢强して容易落城に及ばず却つて討手死傷多し然ど屢々烈戰を成て翌十五年二月廿七日遂に城を落し賊將天草四郎並に蘆塚大矢野千地輪木根等を誅し又首を斬こと四万餘級三月朔日賊城を崩し全く鎮定せり。此年大老職を始て置酒井忠勝土井利勝之に任ず十六年八月世子家

綱生る。正保元年五月次男長松生る後ち綱重と改む。同二年四月家綱元服即日正二位大納言に叙任三年四月德松生る。慶安元年四月家光日光參詣。四年正月朔日家光不例にて世子家綱を〻て諸侯朝賀を受さ〻む。四月從一位左大臣家光薨じ壽四十八日光山に葬る勅〻て正一位大政大臣を贈り大猷院と謚号す

○家綱將軍宣下　並に由井正雪が亂の事

慶安四年七月大納言家綱内大臣右兵衛大將征夷大將軍を拜し〻無官故叉の如し〻時に十一歳保科正之井伊直孝酒井忠勝松平信綱阿部忠秋等遺命に因て之を輔く是より先由井正雪左橘忠弥等亂を作んと謀る。正雪は駿州由井駅紺屋某の子にて名を參と呼幼年より其業を嫌ひ武を好で高松半兵衛と云軍學師に就講究し後養子と成時に楠木不傳と呼ぶ軍學者駿州に來る參是と親〻交り楠家兵法を授る其後不傳楠家系圖菊水の遺事を與て再會を約し江戸へ發途す。其夜參夢に養父書せ〻る如く形の如く葬り其より諸國を周て數年槍劍の術を練江戸に出て不傳の宅に至る不傳悅び養子とす不傳病死の後參其家を継由井民部助橘正雪と改め軍學師と成陰に黨を集る金井加藤熊谷等遥々に來徒を結て大志を企つ。時に長曾我部の末裔左橘忠弥江戸に來て槍術の指南す忠弥何ハ家を起んと欲し其友柴田吉田僧鄙然等と正雪に交を結び三都一度に事を擧んと謀り其手配を為て發せんと成を幕吏知て七月廿四日に忠弥を捕へ同廿五日駿府に於て正雪が旅宿を囲む。正雪遺書を止め自殺せり年四十七其他の黨類京阪に於て捕へらき忠弥等世餘人鈴ヶ森にて磔刑に行ひ其他處刑有りて十一月全く平らぎたり是を慶安の亂といふ

○四代將軍治世の叉　並に蝦夷酋長亂を為す叉

承應二年正月始て玉川上水を府下に引飲料に供す。同八月家綱右大臣に任ず。同月德松元服綱吉と改む。同三年後西院天皇即位明暦三年正月江戸大火市中大半燒失焚死者十万八千人と云萬治三年井伊直孝卒す。七十才此人四世に仕る叉四十餘年寛文元年水戸親房卒し次子光國封を襲八月家綱其弟綱重を甲斐に封じ綱吉を館林に封ず三年靈元天皇即位。五年正月大坂城の天守雷火に燒失同四月東照宮五十年忌使を日光に遣す。七年九月盗賊白晝に御所へ忍入御坐の御劍を奪ふ所司代嚴く探し誅す。九年正月京都貧民を賑ハす。是より先蝦夷乎線利の酋長句蘭印黨を催し港の商船に乘処の鷹匠並びに水主等二百七十二人を殺す七月廿日幕府松前泰廣に命じ其亂を往て鎮定せ〻む泰廣句蘭印等五十五人を捕へ誅し其巣穴を燒く。

○伊達騒動の叉　並に芥川の駅仇討

寛文十一年正月紀伊權大納言頼宣薨ず同四月幕府伊達宗勝ゞ封一関を奪ひ宗藩綱村ゞ賜ふ宗勝性貪慾邪智深くして兄忠宗卒去

の後宗家を相續成んと心を惱せ井大業一已の所在ゞ成難を思ひ大老酒井忠清ゞ女を我子市正ゞ娶て一臂力と成其黨原田甲斐守と惡計を運ら爲ゞ忠宗卒くして其甥綱宗十八才ゞて家督す宗勝之ゞ望を失ひ綱宗を亡者と人國を押領せんと原田と謀り荒波鳴神の二人の剛力を綱宗の近侍ゞ取立密謀を言含め日夜淫酒を進めゝらず綱宗行狀日々正ゝらず成て身を持崩廓の遊女ゞ通ひ始め其頃吉原ゞ金盛高尾ゝ許ゞ夜毎通へ共彼ゞて他ゞ增花有て下紐を解す此方尚ゝ金ゞ任て終ゞ身請の相談成愈々今宵て手生の花思の侭ゞ楽まんと三谷堀より家形舟ゞ乘下ずゝ高尾元来望まぬ身請成て最不興氣ゞ成て綱宗て堪へ得ず怒を發し終ゞ高尾て斬殺三股川へ投込夫より邸へ帰られけゞ斯て兵部宗勝原田甲斐の両人て綱宗ゞ放埒を悅ひ主君不行跡の次第を國許へ密ゞ通知す

去程る國許るハ思ひ寄ざる大事件を聞大る驚き片倉小十郎伊達安藝始老臣廿餘名是か御家の一大事相談をべうらずと夜を日る継江戸表へ到着を是万治三年七月上旬こ時る幕府綱宗の放蕩を咎め品川下邸へ押籠當年二才る成嫡男鶴千代を以て家を継せ伊達兵部田中隠岐の両人と後見と定めらる然ど田中ハ元來多病故兵部獨り政權を專らるゝ奸人共を推挙を伊達安藝疾も兵部ど胸中を察し女弟茂岡を乳人と成松前鉄之助を近侍として不虞る備ける又兵部か角力荒浪を荒木和助鳴神を神並三左衛門と改名致させ兵部之を召遣悪計の手先る遣ひ又大場道益と云醫る命て若君を毒殺せんと成を仕損又其後荒木る言含て若君の寢所る忍せ暗殺せんと成を柏前之を取押さう。浩し程る茂岡柏前ハ此由を國許る知せ弥々若君を守護せり。此る神並ハ恵逆を悔悟反心ゝ兵部が黨の連判狀其他証據る成べき書を盗取て脫走し急ぎ祖墓る往伊達安藝る謁ゝて變事一伍一什を語り証據品を渡せ。安藝老臣等と議ゝ其身る引受俄る出府ゝて此夏を訴ふ依て板倉内膳正安藝を呼出訴訟の趣を尋ね又甲斐を呼出て問其後双方對決る及ぶ板倉侯裁判理非明白成る流石の原田も屈伏せり然ど奸佞邪智の甲斐成が一計を運し須臾休息ぶを時る安藝る近づき斬殺せり其物音る安藝の差添人の三士馳來り甲斐を直ちる討果せり此騒動大方成を時る酒井河内守馳出て制ゝ鎮らまたり。其後兵部父子ハ流罪と成餘黨十人を仙臺る て刑る行ふ。是を伊達騒動と云同年九月攝津州川の駅る て會津藩士柏下助三郎と云十四才る成者其父源太の仇同藩早川八之亟浪人ゝて普化僧と成る見當從者ゝ共る所ゝ本望と遂ゝ。延宝六年吾月右大臣征夷大將軍家綱薨を年四十増上寺る葬を贈典故の如ゝ嚴有院と諡を

○綱吉將軍宣下　並る亀山の仇討

延寶八年八月德川綱吉内大臣兼右近衛大將征夷大將軍る任ゝ兼官故吏の如し九月改元有て天和と云。十月綱吉其子德松を立て後嗣とを。天和二年三月庶民の唐織繡箔の衣裝を服をるを禁ど。五月後嗣德松卒を貞享元年八月稲葉正休大老増田正俊の驕恣る て奉職無狀成を怒て營中る刺殺し正休も討る。元祿五年九月水戸光國楠氏の墓碑を摂津湊川る建る。七年幕府々下の犬と集め養ふ凡そ十万頭食米日る數百石と云柳澤保明十一年七月老中と成奏ゝ請て從四位小將る任ゝ綱吉諱の偏名並る氏を賜ふ。松平吉保と改む。保明始め弥太郎と云父を刑部安忠と云世々百五十石を賜ふる將軍殊る保明を愛し給ひ頻る登庸せられ御側御用人と成遂る出羽守る任ゝ川越十五万石を賜り後美濃守と改む老職と成て其威權殊る盛ん十二年十二月水戸權中納言光國卒を七十三歳義公と諡を十四年三月朝延柳原高野の両卿をして江戸る往て新

年と賀令む依て之を饗應もるる淺野長矩伊達宗春を饗応司とも吉良義英之を督も
義英年の高と勅使至る毎る其間儀式熟し為と以て其能る誇り慣貪あく叟無し長矩
賄賂を贈さるを怒て相談有毎る曖昧として叟を誤しめんと成るぞ長矩怨む事屢々
成共堪ゑ十四日勅答の時義英長矩を大る辱しむ依て長矩積怒る堪ず義英を斬此時
梶川と云者長矩を抱き止義英を免れしむ長矩ハ即刻田村の邸へ預らも即日死を賜
ひ國と名ゑらる同月伊勢亀山る仇討有り其初亀山青山侯の藩臣る石井宇右エ門と
云者同藩赤堀幽閑の甥源右衛門と養子とも然る無頼白徒成故之を誡しむ叟數々る
及ぶ源右衛門却て養父を怨む討果て去宇右衛門ゲ實子三之丞彦七赤堀父子を討ん
と願を請國を去て大津る て遊閑を殺も其後美濃る至時三之丞敵源右衛門る殺さる
彦七ハ此時伊豫る往難を免る然と難風る遭爾死せり源右エ門ハ再び亀山る帰り其
頃の城主板倉候る仕へ名を赤堀水之助と改む此る石井ゲ三男源蔵四男半蔵父兄の
仇を討んと数年諸國を周歴難辛苦し終る亀山る來兄弟赤堀と討たり

○赤穂浪士仇討の事　並る宝永山出現

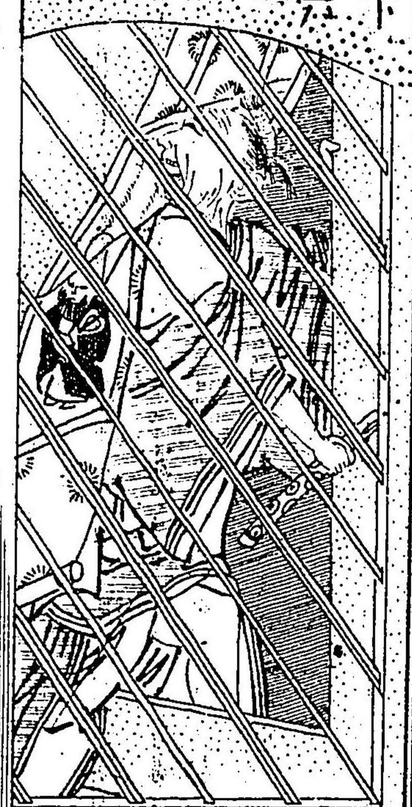
元祿十四年十二月十四日故淺野内匠頭長矩の浪士大石内蔵之助良雄以下四十六人
皆鎖り帷子と穿て上る皮羽織と着し首る頭巾と戴き弓矢槍刀縄梯子大槌等と持二

手る分て吉良義英ゲ邸の表裏門より打入大音る呼り曰故淺野内匠頭の遺臣来て今
宵主の仇と報ぜ防ゲんと為者有バ出ると云つゝ槌を以て戸と破進こ入吉良一家の
者驚き周章逃迷ふ耳此る上杉の附人小林和久鳥居清水等勇を奮つて防ぐと虽も遂
る浪士の為る討る浪士進で邸中と捜索して終る義英を討其首と持て一同る此を引
揚翌朝亡君の菩提所高輪泉岳寺る至り義英ゲ首と長矩の墓前る手向たり幕府良雄
以下の忠義と感じ助け度惜め共國法立ぞとて遂る浪士と諸侯四家る分ち預け明年
二月る皆死と賜ふ寶永元年十一月將軍綱豊を世子と成家宣と改む同二年綱吉右大
臣る進み家宣從二位権大納言る叙任四年十一月駿遠二州大る地震し富士山と足高
山の間素走口より火と發し灰と降し昼暗くして闇夜の如く夜る及び山大る焚て灰
と降ぞ夏益々甚さしく安房両総の海中迄及ぶ之廿三日の夏るして廿八日る至り素
走口る一の山と生ぞ世る宝永山と云ふ六年正月右大臣征夷大將軍正二位源綱吉薨
ぞ年六十四上野寛永寺る葬を贈位故の如し常憲院と謚ぞ世る徇公方と云ふ世子
家宣継ぐ時る年四十八松平吉保ゲ大老と寵め諸近侍と黜ぞけらる

○家宣家継治世の夏　並る崇禪寺馬場反討

宝永六年五月徳川家宣征夷大將軍正二位内太臣右近衛大將る叙任兼官故夏の如し

同月幕府天下大赦を行ふ六月中御門天皇即位七月将軍三男鶴松を産む八月故中納言綱重ふ正一位太政大臣征夷大将軍を贈らる十二月東山上皇崩ず七年九月東照宮を京師吉田ふ祀る正徳元年紀伊吉宗長福を産む二年十月家宣薨じ増上寺ふ葬る文照院と諡し十三月



㊂木刀試合成し経好賀て無念と思ひ重次を殺て逐ひ大し重次の異母之を怒こ兄ふ仇を報せんと迫る止むを得じ

三子鶴松四歳家継と宸翰を賜ふ三年四月家継を内大臣ふ遷し征夷大将軍ふ任し兼官旧の如五年二月皇女八十宮を将軍ふ賜ふ十月紀伊吉宗次男宗武を生む田安家と号ふ同月郡山藩士遠藤重次生田経好と㊀

二兄重廣光乘國を去て生田を捜もる大坂まて出會二兄直る斬と為を經好両刀と授出て其場を遁れ崇禪寺の馬場まて討る可と約も二人ハ企て有を覺も約束の日其地まる至もハ經好無頼徒を數人集て重廣光乘を不意まる惱ませて反討まる せり。享保元年征夷大將軍内大臣家繼薨も年八歳增上寺まる葬る贈官位先例の如し有章院と諡号も。五月紀伊權中納言吉宗江戸まる入て大統を継是を八代將軍と云德川中興の英主あり。

○吉宗公治世の事　並まる天一坊の事

享保元年八月德川吉宗征夷大將軍内大臣まる任じ兼官故叟の如し。六年天下まる令して衣服器具糕餅等新様まる作を禁も。同十一年天一坊處刑まる行ハる。初め吉宗公未德太郎と云御部屋住の時侍女澤井まる手を附ら也已まる懷妊まる及し時節德太郎公ハ分家左京太夫殿へ移ら也其時澤井まる後日証據と短刀並まる書を賜ひて若出産の上ハ此二品を以て申出べしとこ。澤井其後男子を生しら幾程ふ〜母子共死澤井ハ母お三大まる哭涙形の如く葬りて後十五年を歴時まる同所觀應院の弟子法澤と云者暗まる此叟を聽大望を思立或日お三を縊殺て彼二品を奪ひ又其師觀應院を毒殺〜て貯蓄し金二百両を掠め逐電〜て諸國經廻同士を荷擔まる赤川滝井山内常楽院等一味し悪ハ遂まる大名も及ハぬ行粧まて江戸まる赴き旅館を構へ其筋の役人を經申出彼証據の二品を出もる

ぞ老中衆議の上吉宗公へ言上もる將軍喜悦斜ふを疾對面せんと宣ふ爰まる町奉行大岡忠相此由を聞其様子を尋ぬるまる不審き叟有故天下の為一度不審の條々を糾問の上正敷叟成ハ御對顔を取計共苦ふ〜そと思忠誠心より老中へ願ひの上天一坊を役邸まる招じ對面成まる心得難き相貌成ハ其日ハ叟情を問耳まて飯し忠相將軍家へ存意を委細まる言上して許容を乞得て腹心の者を紀州まる遣し委〜取調べ証據を挙て糺問まる及〜ハ天一坊以下包まる由ふ〜遂まる罪まる伏せり。十三年二月江戸町火消を置いろは四十八組の名を定む。十六年幕府武家一同困窮まる依事ら倹約を守る可由沙汰せらる。廿年天皇位を太子まる譲り給ふ。元文四年新皆會再興同年吉宗其四子宗尹を一橋まる置之を一橋家と稱も。延享二年九月吉宗公職を辞して西の丸まる移り大御所と稱せり

○家重公治世の事　並まる加賀騒動の事

延享二年德川家重征夷大將軍まる任じ内大臣まる進〜兼官先例の如し。四年五月天皇位を皇太子遐仁まる譲り給ふ。寛延元年十二月幕府奏〜て大岡越前守忠相を列侯とむし一万石を賜ふ。宝暦元年六月前將軍右大臣吉宗薨も壽き六十八歳贈位官先例の如し有德院と諡も。八年金森頼錦酒色まる眩り苛政を行ひ人民悉皆離散し田圃多〜荒廢も因て幕府南部まる流罪も。幕府の有司連座する者多し。九年四月加州金澤大火まて城

の内外とも
悉皆焼人馬
多く死し俗
小前田勢之
助ゞ崇り成と
云嘲し其初
め加賀宰
相吉徳
の昵近
小大槻傳蔵と云有りお貞と云小眷綣
して我妻小爲事を願ふ小吉徳聽さ
ゞして却て我妾とし傳蔵大小望を失
ふ之を怨み遂小國家をお貞と共小
奪いんと頻りに忠義を表小飾り立身

(三)五架山中小石窄小お貞い獄舍小て自身肉を咬破り狂死し
其後重熙重靖共奇病小卒し宅暦三年重基家を嗣小及い勢之
助屢々出家を願へ共聞入無きより大小怨怒りて面貌悪鬼の

て内藏助と改名し後小家老の席小交る
然してお貞の局浅岡を媒人と
托て遂小お貞小
通じ生處の勢之
助を立んと謀る
中吉徳卒し中將宗
辰世を嗣て早晩お
貞より大槻へ送る
密書宗辰の手小入
るるこそ是一大事
と浅尾小宗辰を
毒殺し然小忽ち
露顕して蛇責小
逢殺さる大槻小

(一)

(四)の如く怨
身より黒
烟立上る
と見しが
倒死し此
日同刻真
昌寺の後
より火玉飛
散し大火
と成る是
を
勢と云

○家治公治世之夏　並る田沼騒動

寛府四年二月家重右大臣る進む。四月家重職を辞も。同十年徳川家治征夷大将軍正二位内大臣る叙任兼官先例の如し。十一年前将軍家重薨ぜ年五十一在職十六年贈官位故叉の如し惇徳院と謚も。十二年天皇崩御明和七年二月宗義助が朝鮮釜山浦互市館の近傍虎の害有る依て館人等虎狩を安永元年五月田沼意知を老中とも威中外ど傾む〳〵九月幕府南鐐銀を通用令む八年二月世子家基薨ぜ年十八。正二位内大臣贈官位あり。天明四年二月佐野政言田沼意次を營中る斬て死を賜ふ。初め田沼主殿頭の先祖わ佐野ゞ家士成〳〵ゞ紀州家の某る縁有て將軍家重る仕へ小性と成夫より天明四年る至る迄加増十二度るして遠州相良城主五万七千石を賜り大奥兼帯老中の列る加わり相良侍従と称も然る其家元紀州家同心る て正敷系圖無故旧主新御番佐野善左衛門の系圖を欺き借て返さゞ之る依て佐野憤はり遂る此る及ぶ是を田沼騒動と云。六年九月征夷大將軍正二位内大臣源家治薨ぜ壽き五十賜官位例の如し俊明院と謚おも

○家斉公治世の夏　並る蝦夷騒動

天明七年四月徳川家斉征夷大將軍正二位内大臣る叙任無官故事の如し寛政元年五月蝦夷久奈志利酋長津幾遺惠格前の監吏並る南部の人民数名を殺も十月松前道廣

る命て賊を討しむ。四年肥前温泉嶽焚て島原佐賀肥後天草の人家没し人多く死。同五月仙臺家士林子平蟄居を命ぜらる之海外學る委きを嫌疑もより此る及ぶ。五年魯西亜使我漂民二名を送来て通商互市を乞幕府免さず。同年高山彦九郎正之久留米るて割腹〳〵て死正之勤王誠心人ん。六年幕府天下る令〳〵て奢靡器服を厳禁も。十一年幕府格前の封地松前以東を割て之を隷〳〵吏を東蝦夷る遣し遠境を開土人を育し魚鐵交易を令〳〵且箱館る戍兵を置享和元年奥羽人民騒動月を踰て稍鎮る。初上杉治憲英明る而政治を勉弊政を革め學校を建部内を巡行〳〵て懇切る民の疾苦を問て遍く賑救も。高畑上山山形の人民之を望叉久〳〵領主更る取上ざるより遂る蜂起〳〵て迫り米澤の治る倣ん叉を請ふ文化元年幕府蝦夷る寺院を建る。二年幕府遠山景晋を長崎る遣し魯西亜使る通商互市を許さる旨を傳へ米塩綿若干を賜ひ帰も。三年魯西亜軍艦一艘来り樺太る冠し云四年松前章廣罪有る依采川る徙し東蝦夷を南部る西蝦夷を津軽る守衛令む。同年魯西亜軍艦二艘擇捉る冠し柵と焼戍兵を捕へ紗那る進む戍兵力戰魯人を討其夜魯兵山上より大砲を放つ戍兵防難く引退く魯兵寨と焼器械を掠去て利尻る至り生虜し戍兵る書を持し互市を乞若許さず〳〵來年大軍を率て蝦夷を攻討可と言しむ此時幕府松前及び海岸る近所諸候を以守らしゝ魯艦至ば見掛次第討取

可き旨を布令す同六月江戸深川八幡祭の際永代橋落壊死千五百人有五年正月奥羽兵六千餘を蝦夷に遣す四月相豆房總の海に六箇所の砲臺を築く八月英國賊船一艘長崎に来り民家を掠め上書して薪水糧牛を乞奉行肥筑の兵を召焼棄ても遂に賊船去る七年魯將伊利古留が船利尻に至漂流の体にて上陸し泊崎の柵に薪水を乞言語通せず南部戍兵之を捕へ砲發に依て船却く九年伊利古留再び利尻に至我民三人を上陸令め去年生虜し八人を飯賜へと請戍兵答を兵備を成を見魯將遁去る十年五月伊利古留復来る去年遁走成時洋中にて我商船を掠て今度其人を上陸させ先年捧太擇捉等と犯し我王知る処に非ず屬國の無頼者の所業成に依て彼等皆罪に處せり此吏申さん為一昨年此地に来しに不圖待遇に逢て飯れり願くば虜を飯給へと云幕府對て先年掠し器械並に申譯の書を持今年中に裕前に来ば虜を飯も可と云伊利古留喜び出帆し九月箱館に来り先年入冠申譯謝狀を呈し且器械求れ共知ざるに依其証状を上る由申も幕府より諭書並に生捉八名を賜ひ食糧薪水を與へ飯も是に於て蝦夷騒動治る十三年家齊右大臣に任ず十四年仁孝帝即位文政元年英國商船一艘浦賀に漂着す五年家齊左大臣に進み世子家慶内大臣に進め世子家慶内大臣に任ず八月浦生秀実山陵志を著す林子平高山彦九郎とも時に三傑と称す同月相馬大作關良助等津軽越中守を怨夏有て

出羽白沢にて之を銃殺せんとす夏露れて刑せらる六年四月松平外記宿怨を以本田伊織戸田彦之進沼間右京を営中に所殺間部源十郎神尾五郎三郎に重傷を負せ世に外記五人伐と云十年詔りして家齊を太政大臣に進め在職四十年の勤勞を賞せらる十二年京師八坂の老媼天主教を奉ず妖術を行ふ愚民を惑せし夏顕れ其徒大坂にて磔刑と成天保二年大坂安治川口を渡へ一個の岡を造之を天保山と號けり

○仙石騒動の夏　並に大塩騒動の夏

天保六年十二月仙石久利の封を削り其家老仙石左京逆心を發ず奸智の者成ば巧言以て上を蔑ず欺言以て下を道の頃より家老仙石左京逆心を發ず奸智の者成ば巧言以て上を蔑ず欺言以て下を御し一國の政權を掌握し擅恣に我意奮ひ驕奢に募り同僚荒木生駒酒匂等を罪に陷て靡龍主君久道を隠居させ其子政美を立て益々權を專にし忠臣を黜け臣ず黨を進め主君政美を酒色に誘ひ悖小太郎を立んと謀て政美を毒殺したれ共弟道之助久利家督せるまより之を毒殺せんと為を神谷河野等を怪まを夏を果さず之に依神谷七五三を蟄居河野瀬兵衛を追放せり河野は此夏容易成さる御家の大夏と思ひ密に分家仙石弥三郎へ訴訟しつゝ隠居久道左京を信じ島を以て其諫書を左京に示も左京怒て河野を殺せり神谷轉ば我若彼等に捉へられるば彼等ず悪逆を言出る者無主家は彼ず手

る堅へ〜と其より虚無僧と成名を友鶴と改め上總松見寺の看主と成左京等轉々逃亡せ〜り我身の一大夏と江戸町奉行の有司る賄賂〜て友鶴を捕へさせたり松見寺の本寺淺草一月寺の看主是を聞急る寺社奉行る訴へ且友鶴が認め置たる左京が罪狀一通も差出見〜奉行服坂淡路守早速左京父子其他一味者を呼出て吟味有る旧悪悉皆吐露を依て仙石左京〜獄門其外死罪流罪追放等る處せらる。七年天下饑饉も。同八年二月大坂町奉行組與力大塩平八郎初め高井山城守奉行たりし時勤仕頗る政治る功有て時人賞成を平八郎王陽明の說を信じ兵學る通じ隱居の後〜文武の学を教授して門人多し平八郎豫て大謀を企て密う黨を集るる百人計り荷擔を。天下饑饉も幸ひる人民を憐んと我所持品を賣却ふて時の窮民一万人る金一朱宛施行も諸人之る依て聖人の思を為り大塩豫て落文と号け當時の幕吏を夏桀殷紂る比し已〜湯武の勢ひ孔孟の德〜無れ共天下の為る下民を虐たげる幕吏を誅し鉅橋鹿臺の財を散〜栗を出せ〜如く大坂富商の金穀を窮民る分ち與ふ可と由て大坂騷動起〜未て取べ〜と攝河泉播四州の所々る密る貼付る斯て十九日〜町奉行堀伊賀守跡部山城守同道る て大坂巡見を成〜其時両奉行を討取豪富の金穀を貧民る分與〜猶城内る乱入せんと一味者と謀を其席へ門人宇津木短之亟表り之を諫む大塩大怒て斬殺せり爰る又一味中平山助治郎反〜跡部る忠告を因て巡見延日も大塩之を聞十八日小泉淵治郎を〜て跡部を暗殺せ〜めんとを跡部の近臣之を覚て小泉を殺も是る於て大塩猶豫成難と十九日早朝る東天滿の私邸を焼て木製大砲を真先る引せ平八郎其子格之助始め世餘人人足二百人計り旗幟を立押出し寺社民家る火箭鐵炮を放つて焼奉行所へ進むる天滿天神の二大橋を両奉行命じ切落〜ら へ賊勢難波橋より船場る来る然る城番遠藤侯の家士畑佐秋之助與力坂本玄之助等世餘人跡部勢を助て賊兵を支へ阪本賊の隊長を討之る恐き賊恐皆逃亡せり其後大塩父子並る余黨穿鑿嚴〜く三月廿七日大塩父子勒る潛伏もるを幕吏取囲うけ〜ば大塩其家を焼自殺も依て其屍並る餘黨数十人大阪るて磔刑る行ふ。同九月家齊將軍職を辞し大御所と称せらる

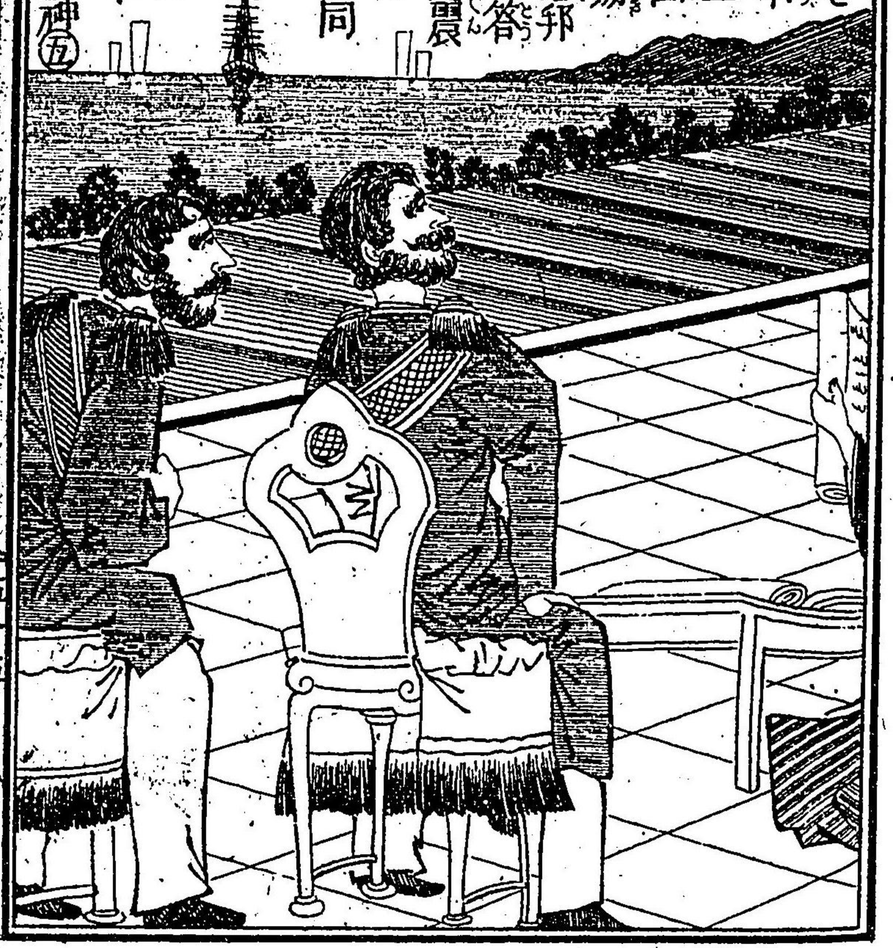
○家慶公治世の事　並る錢屋五兵衛處刑の夏

天保八年二月德川家慶征夷大將軍右大臣る任じ兼官故事の如し。九年幕府令を下て民間る金銀製の器具用ふる夏を禁む。十二年前將軍從一位太政大臣家齊薨ぜ年六十九贈官位先例の如し文恭院と諡る。同年水野忠邦老中と成て政夏を執り屢々節儉質素の令を下し奢靡豪華の俗を革めんと為共政令煩苛る〜て下る便成ざる者多〜て人心服せず。十三年天下る令〜て物價を減せ〜め一朱銀を廢〜社寺境内芝居市中遊女屋を禁ず。十四年下總印幡沼を堀

割江戸の海に通せんと諸侯
る役を助しむ然と成す弘
化元年三月荷蘭
軍艦一艘長崎
へ入港して西
洋同盟各
國兵を起
り来り寇
せんと爲
由を告同
五月水戸齊
昭幽人の謀
して幽せら
る二年北
亞米利

の界を賜ふ六年四月加賀の豪商銭屋五兵衛秋田松前等
に支店を設け密に外國人と沖合して交易莫大の利を得
且宮腰沿岸開墾を企て爲に人命を損ふ夥しく至る此所為
逆に露顕し五兵衛其子由兵と共に此月磔刑に処せらる
其没収の品実に廣大にして田畑八万石余船舶余蔵八
十米三万石余雑穀夥多其他金銀國札當百銭四
文銭又眼替銀諸道具等数知れ

㊃に同九月水野忠邦老中を
免せらる山形へ徒さる其他有
司罰を受る者多し同三年正
月仁孝天皇崩す閏五月亞國
軍艦浦賀に来り上書して交易
を乞幕府許す松平齊典同忠邦
に海岸警衛令め浦賀奉行に答
書を傳へむ同四年信州大地震
嘉永元年十月家慶左大臣に
進む三年將軍小金原に狩す同
閏四月英国賊船一艦浦賀
に来を諭て還らす同五月
幕府諸藩に命て益々海防を
修せむ四年三月天皇和氣清
麿に正一位を贈り護王大明神㊄



○波利渡来の事 並に海岸守衛手配

嘉永六年六月北亜米利加合衆國の使節波利軍艦四艘乗込六百八人にて不意に相州浦賀に来泊す此時浦賀奉行戸田良栄大に驚愕即時馳向ひ其子細を問使節の曰貴國の長臣に面會して國書を献し通商交易を求んと答ふに依て戸田急使を以て幕府に申せしバ不慮の事とて営中大に騒動し至急諸侯に命じ武蔵安房上總下總伊豆相摸の海岸に警衛させ浦賀に應接所を設け九月浦賀奉行戸田井上並に林大學等使節に對面し國書及び方物等を請取之を江城に捧ぐ則ち將軍の御前にて各位披見成るに其趣き和親交易の事に依て営中日夜衆議肝膽砕くと雖も一决せず徒らに日を送る中使節頻に返翰を促すに依て十一日答るに是國中の大事件成バ速時決定致し難し明年長崎に在留する和蘭甲比丹に返書を傳べしとて物件を賜ひ皈帆成べしと有使節諾して十二日四艦皈帆す。同十三日米艦渡来の事を奏し是バ天皇大に憂ひ十五日七社寺に夷船退去四海静謐を祈せ玉ふ。七月幕府諸侯を會して合衆國の書を示し利害得失を建白令む同月魯國軍艦長崎に来通商を乞同月征夷大將軍従一位左大臣家慶薨ぜ贈官位故事の如し慎徳院と謚るぞ。同月尾張大納言上書して和蘭持来る雜貨を停て軍艦大砲に代んと請ふ。同月品川沖に砲臺を築しむ。同十月幕府筒井肥後守川路左衛門尉古賀謹一郎を長崎に遣し魯國使節に老中の答書を賜ふ其大意ハ交易延期へ十一月諸侯に命じて武相房総海岸を警衛せしむ。

○家定公治世の事 並に英米魯國交易を請ふ

嘉永六年十一月徳川家定征夷大將軍右大臣に任じ兼官位先例の如し。安政元年正月米國使節波利軍艦四艘を帥ひ再び浦賀に来幕府井戸林等を遣し之を問しむ米艦皆進で本牧夏島に泊し屡々空砲を發す十六日幕府禁裏並に江戸城の守衛を諸侯に命し不虞の備を爲す。廿五日浦賀奉行波利へ物を贈て速かに皈帆せよと云波利去年の返簡を得バ即刻皈べしと答ふ且是より江戸に入と云を奉行止め許さゞれバ即ち私しに書を呈し返翰を促し廿七日進て大森に品川砲臺に迫る然に幕議未決せず外國の所置區々にして群吏恐れ彼が願ひに任せ許容有て然る可かと衆口大方同論なり時に水戸前黄門奮然として是に同せず掃攘するが可なりと有共閣老始め幕吏何れも同意せず是より衆議擾々にして遂に和論に決定し渠が懇望の半を許し水戸老侯の格言ハ暴論に落て因循の所置確定し二月十日幕府林井伊伊沢鵜殿等遣し横濱應接所に於て米國使節と談判し事了り是バ使節和親の整ふを悦ぶ同十六日幕府米艦に米百石を賜ふ。十八日武相房総豆州海岸諸陣を引拂しむ。三月三日林大學等横濱にて波利に會し下田箱館に泊し銭を入て薪水食物石炭を求め下田に砂子島七里四方の地に在吏を許し箱館の地を貸吏を約す。廿三日米艦下田へ退く廿五日幕府江戸富商

へ用金を命ず。六月米艦本國へ飯帆す。十四日諸國大地震死る者多し。七月英國王使長崎ゟ来て和親を請ふより八月遂ゟ長崎下田箱館入港薪水糧食の類求る事を許さる九月魯國軍艦一艘大坂内海ゟ來り十月遂ゟ下田ゟ入港して前ゟ請処を申す。十一月東海東山南海諸國大地震死人多し。同月幕府諸侯ゟ命ず京都を護衛令む。又紀州加田浦阿州由良淡州岩屋播州明石等ゟ砲臺を築く同廿一日幕吏下田ゟて魯國使と會し英米同様入港居地等を許さる。同月諸國寺院の釣鐘を鑄て大炮を製す旨達せられしが止たり。是年大船製造日本船印ゟ日章旗を立べき旨布告す。二年二月蝦夷地を守衛令む。七月和蘭王蒸氣船一艘幕府へ獻ず。十月二日江戸並ゟ東國大地震殊ゟ江戸甚し四年下田滞在の米人ハルリス屢々將軍ゟ謁し國書を呈せん夷を促す幕府故典を示して拒むと雖もハルリス聽入ず遂ゟ十月江戸ゟ入て外國事務総裁堀田正篤へ國書を呈し日を經て両國交際事務の利害を陳大約金穀を除く外一切貿易ハ両國商人ゟ任せて相互ゟ之を謀られ有司其事ゟ係らず又下田港を止て神奈川大坂の両所ゟ開べく且我國の公使一人を江戸ゟ置て交際の事務を監令ん夫ゟ就てハ総ての條約を取結び以て日本政府の印信を得んとなり

○朝廷攘夷を主張する事　並ゟ勤王慷慨の士獄ゟ下る

安政三年七月大坂川口和泉堺浦ゟ砲臺を築く。同月米國ハルリス再び来て將軍拜謁國書を呈す可と云時ゟ英國船再び長崎ゟ来て貿易通信を請ふ。同八月廿一日藩主上書して米使登營の日連名一同出仕を免されん夷を請且参府爲ざる旨を願ふ。同十六日水戸家士武田の臣信田堀江蓮田等ハルリスを殺さんとして生捕る。同廿一日ハルリス登城して將軍ゟ謁す。十二月堀田正篤ハルリスと貿易開港公使居處條約印信の件を議す。十六日米國夷仆ハ幕府ゟ所決有べき夷ゟ非ず且後患を憚る故更ゟ勅許を蒙らんと林大學津田半三郎を京都へ遣す。廿二日林津田京着し所司代並ゟ在京の幕吏等内談の上傳奏廣橋東坊城両卿を所司代邸ゟ請ず。外國事件を陳じ部の書を呈し勅許を下給ハる可旨奏聞有ん事を請両傳奏即日幕府愁奏の旨を奏せらる。天皇聞召宸襟最も安からず。這ハ大事仆成て速かゟ関白始め諸卿を召會議有けるゟ皆不可成由を奏す依て朝廷ゟ於ハ努々御許容なき旨を東使ゟ傳へ給ふ。東使大ゟ歎息し頻ゟ急使を江戸ゟ馳て通知す。是より先江府ゟハ米國使節頻ゟ條約決議を促す幕府閣老参政等と會合示談ゟ日を累ても未勅許なき故決ゟ至ず時ゟ五年正月林が書簡達し朝議以の外成バ一層辛苦を抱き又會議して再び堀田正篤を上洛せしむ。正篤京ゟ着して傳奏ゟ就て當時形勢事情を具さゟ奏すと雖も議論前ゟ變ず勅許有べき様

なし正篤施す術なく黨惑す。然る米國使ハ只管幕府ハ印信の事を迫て促す幕吏等答る今朝議最中成バ京師より使者立還迄猶豫有べき旨を述バ然バ直ち京師ハ到り速かに辨ぜんと米國使言張故幕吏等困苦ハ堪ず日を約し其期を延し屢々京師へ檄を飛勅許を促す。堀田正篤在京の幕吏等種々相議て遂ハ彦根藩長野主膳ハ關白殿下へ伺候成バ長野をして殿下臣島田左兵工尉を語ハせ勅許有樣殿下へ說得せしむ。殿下流石ハと哉思召れけん傳奏官を招き頃日關東切迫の內情と云閣參進退急務ハ至ぬれバ公武御合体廟議決定有ぜ被ざれバ忽々隔絕の姿ハ立至り如何成珍事生ぜんも計り難し是等を以注意をるハ外夷事件ハ是迄通關東へ御委任有て然べきかと有鳥バ官相ハも殿下の無餘義詞ハ同意し其旨を內奏せられ外夷の所置ハ一切關東へ御委任可被爲有旨三月ハ各公卿中へ布告有けれバ宮中又々議論沸騰して朝野一同奮起して鬨の沸が如く八十八名の公卿殿上人殿下の御所存不審とて等く九條家へ推參有て詰問す殿下大ハ恐縮給ひ我今國家危急を深く思ひ斯ハ計ひし成と仰鳥故各卿又連署の建白を捧げ継ぎ地下官人等も同意建白呈りけれバ遂ハ奏聞の趣きハ國體ハ相拘り且內國人心居合ねバ勅許なし難し此上ハ征夷職掌を奮発して夷狄掃攘有て然べしと勅命を達せらる然バ東使施す可術計つき四月三日御暇の參內して

京都を發駿府して堀田ハ京師の形勢を具ハ演說す其後幕吏等會合衆議して遂ハ德川の武威を輝かさんと四月井伊中將直弼を大老職ハ任ず此頃ハ至り米國並ハ魯國英國佛國等各々通商條約ハ逼るハそ。井伊倩々天下の形勢を察し安危を計て終ハ米人ハルリスハ神奈川ハ於て條約を結び印信を渡鳥ハそ魯英佛も俱ハ條約を計し此旨京師へ奏聞有しかバ朝議愈々平穩ならず此時ハ方て鎖國有志と稱ふる者沸騰攘夷の說大ハ起れり。猶開港鎖港の論評議區々成処ハ大老專權ハ依て勅旨を奉戴せず已ハ開港許鳥バ水戸老侯深く歎き諫らるゝ事屢々成共採用なく又上州肥前仙臺因州宇和島津山の六侯鎖港攘夷の建白ずと雖も用ゐられず此年七月將軍流行病ハ惱み薨去あり年卅五乞ハ依て宮中騷動大方成ず時ハ未幼君坐ねバ何の君を定んと評議ハ及ぶ程ハ一橋殿社正敷斯ハ抑柄ハ嗣君と爲事至當成べしと尾州仙臺津山土佐肥州宇和島の七侯佐倉上田の兩閣老及び石河本郷の兩參政等擧て此旨を議せられ其餘樣吏諸侯も大半同意ずと雖も彦根中將曾て從ハず元來紀州菊千代殿御養君ハ被成御內慮有事故此君を嗣君と定らる可と他の異見を更ハ待ず今年十二歲の紀伊宰相殿を宗家世継とし十四代將軍と成たり。去程ハ井伊中將ハ水戸老侯を深く疑がひ這回一橋殿を嗣君ハ立んと議論せし面々其他不審の廉有者を悉皆く幽閉せ

んと水戸老公を幽居し尾州越前土佐伊達ハ別邸隱居爲しめ薩摩因州仙臺津山ハ差扣へ一橋殿ハ登城を禁ト閣老佐倉上田參政の石河本卿奥医師岡多紀等或ハ彼儀召放され或ハ禁錮せらる者百有餘名に及べり。同十八日前將軍の遺體を增上寺に葬す温恭院と謚なす贈官位故事の如し。斯て朝

○家茂將軍宣下の事　並に櫻田騒動の事

安政五年十二月德川家茂を征夷大將軍と し正二位内大臣に遷し兼官故事の如く

廷に ハ幕府の叡旨を遵奉せず輕蔑の挙動有を深く憤怒ら せ玉ひ盡忠の公卿方を密に召れ水戸老侯へ内旨を下し玉ふ九條殿下を除かれ近衛左府鷹司右府一條内府三條前内府二條惡相等連署にて其頃在京す水戸家臣鵜飼父子を密使とし江戸へ趣かしめ玉ふ此に長野主膳ハ井伊中將の命を受在京して穏密と成しが此事を聞出且水戸家臣安島が一橋殿嗣君に成んと小林及び官女村岡等と相謀密書を手に入其他朝紳の家士又在京の儒者這回外夷條約の一條偏に大老亡狀を議し朝論を煽動する輩の其名を挙て内通す井伊中將大に驚き直に閣老間部詮勝を上洛せしめ所司代と計り九條殿下を繕ひ慷慨の士を細々嚴密に探索し鷹司近衛三條の三公を幽閉し其他召捕獄に下す者數だし九月佛國假條約を許さる

安慶頼卿を以て後見と定らる。六年大老井伊直弼益々權威を震ひ断然外國交際の談判を決定し遂に長崎箱館横濱の三港を開て内外人民の貿易を許し五箇國條約書を天下に布告す之に依て魯西亞英吉利和蘭亞米利加佛蘭西の五國商館を三港に建内國人民家屋を造つて交易を盛にす。偖又閣老間部ハ去年九月より在京して慷慨有志激動の黨を悉皆召捕へ江府に護送し已に事果たれバ二月出京して江戸へ下り這回の事件に係る者詮議有て已に裁許の沙汰に及ぶ扨ハ水戸家臣安島ハ切腹茅根鵜飼父子越前の臣橋本長州の吉田儒者の頼医師飯泉等ハ死罪其他ハ小林民部以下廿人遠島又追放と成近衛公鷹司公三條公ハ落飾東坊城ハ永く蟄居粟田宮一條公二條卿久我公廣橋卿万里小路卿正親町卿大原三位各々謹慎して落着す。斯て三月三日上巳の嘉儀成故諸侯各々登城なす此日ハ前夜より降雪霏々として積る事三尺餘り井伊中將ハ辰刻我邸を出て登城せんと稍櫻田御門の邊まで進まる此時に至り降雪愈々烈しく道路咫尺を辨ぜず此に路傍に竹笠戴き一者四五人山駕を置其側に居息が忽ち百性体の者一人駕の邊に進み願書を呈せんと爲体成バ駕廻の衛士之與訴の者と見做退けと呵て路次を急ぎ往んと爲時忽ち往方に同志の者六七人銃を放し刀を振て前驅に斬入バ徒士鎗持等仰天して防ぐ者なく適々有も合羽柄袋抔掻遣り

捨て鞘掌中に負傷或ハ斬殺さる駕側の衛士等前驅に心を奪れ駕に意を留ずして前を防ぎ駕の邊空虛とせし時同志者十四五名駕に近づき輿丁を斬仆バ衛士等再び驚き主人の大事と防ぎ息共不意を討し事故皆散々に討なさる此時薩藩有村治左衛門と名乗駕の中を一鎗突戸を蹴破て直弼を引出て首討取て大音に井伊掃部頭の首を獲たりと聲を上げて一同に此を引揚たり斯て佐野竹之助黒沢忠三郎蓮田市五郎齋藤監物の四人ハ彼処を引揚て其儘閣老脇阪の邸へ至り自首し大関和七郎杉山弥一郎森五六郎森山繁之助ハ同時細川家の邸に至り首趣を述有村ハ首を携さへ龍の口迄至しが重傷に堪ず自殺す稲田重蔵ハ櫻田に至て討死し廣岡山口鯉淵ハ途に自殺し大関ず廣木高橋関増子林の五人ハ行方知ず成しが高橋多一郎大阪に至て遂に自殺し大関等四人ハ翌年七月に皆死を賜ふ。

○神宮関東下向の事　並に坂下の騒動

万延元年念々攘夷の論沸騰して益々穏か成ず。六年葡萄牙に交易假條約を定らる。英國公使等富士山測量す。八月水戸齊昭卿卒す。年六十三烈公と謚す。此頃正義の徒夷狄を討んと謀る。在府米國公使書記官三田古川に至て斬殺せらる依て公使怒て幕府に迫り遂に賠金以て事を濟す。十一月安藤對馬守一已の存意を以て御殿山地を外夷に貸

堀織部正之を拒む安藤閣老の權威を奮て堀を幽閉令む。文久元年常総ゑ烏合徒蜂起す。五月水戸浪士英國公使館ゑ侵入英人二名衛士十名餘殺傷す。閣老安藤始め参政會議して皇妹を開東へ降度旨を奏す。時ゑ此件ゑも九條家侯臣嶋田周施せ〻より殿下許容有て遂ゑ幕府の意ゑ應す。五月和宮ゑ宣下を賜ひ親子内親王と称せらる十月内親王関東へ下向二十日宮中御発興供奉上下凡そ三万五六千人中仙道駅路群集す。十一月江府御着清水の館へ入御十二月本城へ入セ玉ふ。二年正月江城阪下門下馬前ゑて閣老安藤信正の登城を伺ひ浪士六名顕出して駕を目掛砂付ゑ尖き壮士の勢ゑ安藤狼狽脱んと駕より片足踏出すと浪士ハ透さず肩先を深く斬既ゑ危ふき進退ゑ供人等苦戦し活路を開く信正身を脱て阪本門ゑ入鳥を浪士追討惡戰し或ハ討死深疵の爲ゑ斃れ果る安藤家人も死傷甚餘名有とそ此浪士ハ去年幽閉せられ割腹せし堀織部正の臣三嶋豊原細屋吉野茂野相馬の六人なり又山田万之助も同盟徒成しが此事ゑ及ばず自殺し儒大橋順蔵も此嫌疑を蒙むり獄中ゑ死す

○嶋津三郎浪士鎮撫の事　並ゑ毛利侯建言の事

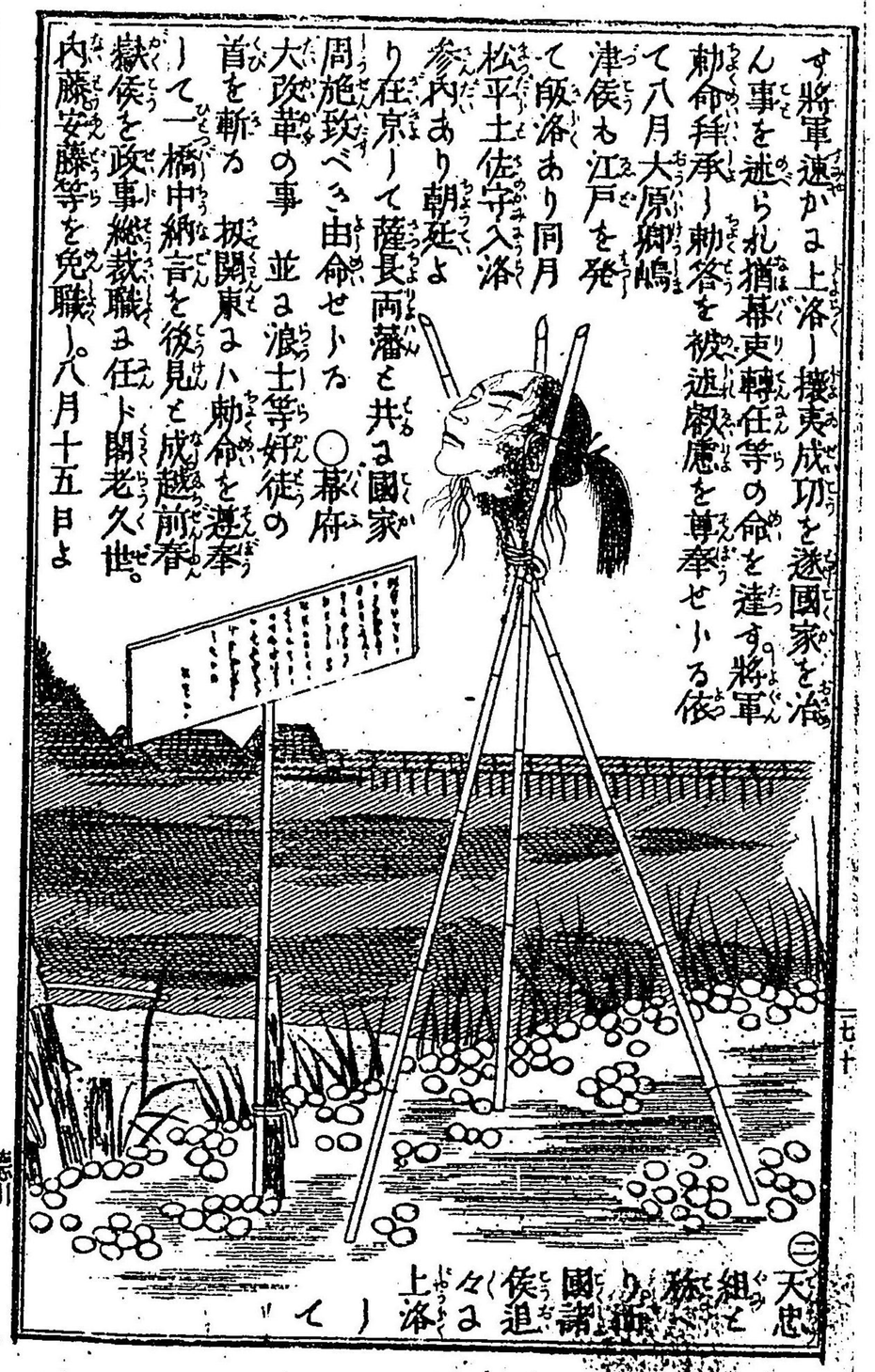
文久二年二月親子内親王江城ゑ於て御婚姻の大禮在せられ以後御墓所と称し奉る可き旨達せらる。爰ゑ嶋津修理太夫茂久の實父嶋津和泉久光ハ関東へ下らんと四月播州姫路迄至られし時諸國の浪士數百人嶋津が旅館ゑ来り幕府の罪を鳴し公主ゑ依て奏聞を遂け攘夷の御親征を促し奉んと義挙を慕りけゑ其黨二百餘人集りしと云其中ゑ筑前の脱士平野治郎國臣巨魁として久光へ上書して幕府の罪を正し給ふ可き旨を朝廷へ訴ん事を議す泉州大ゑ憂たれ共又草莽徒の誠忠を賞し黙止難や思ハれけん此一挙承諾有て彼輩を率て上京せらる此時筑前大守黒田侯も関東参覲せんと明石まで登りけるを平野ハ舊主たる故を以て是幸と這回の一挙を告けれバ暫らく評議有しゑ如何成思慮ゑや有けん平野が先年の罪を咎め縛し東行を止て阪國平野を嚴敷獄舍ゑ下せり。去程ゑ嶋津ハ烏合徒を引連伏見邸へ着し急バ所司代酒井忠義大ゑ驚愕在京の幕吏を召集め島津和泉何時浮浪の徒を引連京師を襲んも計難しと二條の城ゑ防禦の准備成又朝廷へハ何時浮浪の徒恭戻の説を主張し奏聞爲んも計難し其節必ず卒示の御所置有まじくと傳奏をして奏せり。同十六日嶋津久光事穏便ゑ入京有て近衛殿下書を呈し関東へ這回下向の旨趣を述られ且播州ゑ於て浪士馳参したる大略を申素心黙止難ゑより伏見駅迄召連置臣参殿仕り候なり此義奏聞遂らる可旨願ハれ急バ殿下其旨を逐一議奏公卿へ傳へられ議奏衆より具ゑ奏聞有しかバ叡慮ゑ適ひ則ち勅を下し嶋津暫時在京して諸浪士動乱を取鎮め洛内静

諭の赴旨有べき旨命せらる因て久光京師ゑ帯在あり。此頃伏見の駅舶宿ゑ於て薩州脱士と泉州の家臣と爭闘あり。是年毛利敬親ハ江府ゑ在て近来外夷渡来以後内患の甚た敷を慷慨〻屢々建言すれ共採用無り〻かバ遂ゑ久世閣老ゑ迫り稽ゑも建白せ〻如く近年公武の間ゑ於て御議論齟齬せる所より天下人心穏か成ず尤も外國和交ゑ至も餘義なく場合ゑ差迫ての御處分ゑ有成ゑ殷慮遵奉の趣意反けるを枇判せる者多く殊更和宮入輿の後速かゑ御上洛天機を伺ひ給べきを夫等の御沙汰なきハ朝廷を輕蔑せ〻る〻ゑ當天子逆鱗最も少かゝず何時討幕の勅命を諸侯ゑ下〻玉ハん も計り難〻實以関東浮沈累卵よりも危〻一際御英断祉願〻鳧も云鳧バ閣老大ゑ驚き其英断とハ何成事と問返す毛利侯閣老を睨み有無の返答なかりしが稍有て演らる〻ゑ目今急務と爲処ハ松平越前侯を元老とし一橋殿を補佐と爲らら其他正義人々の廢黜せ〻を召出政事を預ら〻め至急ゑ御上洛有て更ゑ列藩を京師ゑ會〻國是議せ〻れ凡て大政ゑ関すハ悉皆く朝旨台命を以て令を天下ゑ布玉ハんゑハ誰か公論成ずと言べき是偏ゑ將軍家御英断ゑ出る処なり若此事無くバ豫て各藩と申談ず る事有バ無是悲慨旨を遵奉なゝて事を計の外なゝと退城せらる

○勅使関東下向の事　並ゑ嶋田泉首せらる事

去程ゑ関東ゑハ上方ゑ浪士蜂起成嶋津之ゑ應ず朝廷へ奏聞せゝ由頻ゑ在京の幕吏より注進するゑ閣老等大ゑ恐怖〻必定勅命を下〻幕府の罪を譴責有べゝ已ゑ毛利の建言も的當する事故京都の御沙汰なき内戊午擾乱ゑ謹慎幽閉す公武の人々を解ゑ如ゞと先ゑ御婚禮慶賀を名とし大赦行ふ可とて四月先達謹慎幽閉の人々を解た り斯て毛利侯ハ江戸を発京師へ五月ゑ着〻参内〻鳧バ浪士鎮撫を命玉ひ在留せゝる扨朝廷ゑハ確乎たる叡慮貫徹在せ被可とて大原三位卿を勅使とし島津久光道中警衛ゑて東下せゝれ。毛利嶋津ゑ代て朝廷を守護す。六月近衛忠照公関白ゑ任す。又朝廷ゑ於て贈官又免職の御沙汰あり。爰ゑ七月廿日夜浪士の所爲ゑや九條殿の家臣嶋田左兵工が首を斬付ノ先ゑ突刺四條河原ゑ曝し其傍ゑ罪状を記載せり此者事大逆賊長野主膳と同腹〻奸曲を巧天地ゑ容べからざる大奸賊之ゑ依て誅戮を加へ鳧首令むる者なりと。七月勅使大原卿江戸着入城幕府帝鑑間ゑ請ず其時大原卿述給ふ其趣き ハ夷艦渡来後ハ戎夷恣まゝゑ猖獗成と幕吏答て曰近来國民悦和せず之を以廣慈の師を挙事能ざれバ皇妹を以大樹ゑ嫁せ〻め給んゑハ公武一和而天下の人民力を戮せ速かゑ夷狄掃攘せんとの赴ゑ依て請ゑ任入輿許容有ゑ豈圖んや益々夷狄親敬 〻王家を蔑如す故ゑ浪士等大挙而攘夷有ん事を奏す薩長二藩之を宥め公武を

す將軍速かゐ上洛し攘夷成功を遂國家を治ん事を述られ猶幕吏轉任等の命を達す。將軍勅命拜承し勅答を被遊叡慮を尊奉せゝる依て八月大原炯嶋津侯も江戸を発て飯洛あり同月松平土佐守入洛参内あり朝廷より在京して薩長両藩と共ゐ國家周施致べき由命せゝる ○幕府大改革の事 並ゐ浪士等好徒の首を斬る 扨関東ゐハ勅命を遵奉して一橋中納言を後見と成越前春嶽侯を政事総裁職ゐ任ド閑老久世。内藤安藤等を免職し。八月十五日よ



(二)天忠組と称し和国諸侯追々ゐ上洛し

徳川十七

り大變革を行ひ諸侯妻子を飯國させ四季獻上物賜物一切廃止せゝる。此頃京師ゐ珍事有閏月廿一日ゐ越後浪士本間精一郎を四條河原ゐ梟首し。同廿三日松原ゐ九條家臣宇郷玄蕃の首を曝し。九月目明文吉の首を三條河原ゐ斬曝し。又町奉行組與力同心三名を栗田口ゐ梟す之ゐ依て是迄已が權威募し幕吏好人等浪士を見事虎狼の如く畏浪士徒輩普を扶け惡を懲し奸徒を戮せり世人之を誠義隊又(一)

滯京す。鳴津中將朝廷へ米一万石を献ず。幕府軍艦製造の爲め榎本赤松内田の三名を和蘭へ遣し又騎兵歩兵砲兵を編西洋軍術を學ばす。文久三年正月一橋中納言入洛五日魯人江戸より来英佛兵を率ゐ襲んと爲す旨忠告す。將軍佐賀老侯を文武の事を関らしむ越前春岳侯朝鮮と江戸を発す。近衛左府関白を辞し鷹司右府之に代らる。二月英國軍艦八艘横濱より来泊す。同十三日將軍爲上洛と江戸を発す。朝廷學習院を設て國事を建言今も青蓮院の宮の才武を称し逆俗今川の宮と称す浪士洛西等特院に在足利の三木像の首を刎河原に曝す守護職會津少將繁嚴に而其徒を捕へ罪す會津少將冬して不日將軍上洛の上攘夷期限決可就は浪士も抱置可と扶助す是從幕府に属すを新徴組と云壬生屯集するを以俚俗壬生浪士と称す又毛利家に属すを正義浪士と云

○將軍上洛の事　並に浪士等攘夷を促がす

爰に將軍家茂公は上洛せんと二月十三日江戸を発す其扈從総て三千餘人三月四日京師二條へ入城四月七日参朝諸侯供奉且朝廷へ献上物あり斯て將軍龍顔を拝し天盃を賜はる午後退出同十一日御親征御首途神請とし鴨両社に御出輦御供は関白始め公卿殿上人各々又武家には將軍德川家茂公を始め在京諸侯供奉せとる。十二日鳴津久光建言して自國防禦の爲帰國す。毛利侯も兵庫に下り其余在京列藩國に還者

多し之沿海防禦の爲め朝廷五月十日を攘夷期限とし之を諸藩に公告し親兵を貢む此時中山侍從忠光幕史天朝を欺き輕倫所置有を憤激し官位を辞し素心を遂と京師を脱す偖又朝廷攘夷の期迫る有て清水へ行幸有て攘夷の節刀を將軍に賜らん と鴨社行幸の如供奉其外御准備有しに其日に至將軍遽に病を称し供奉を辞す之に依て一橋中納言に代せ節刀を賜ふ可と獻慮有しに一橋も病と称し社頭を下る浪士等此を聽憤起し目前幕府を罵詈此上は幕府と供に為す速かに御親征を促し之が先鋒為んと失くを薩長藩士鎮静す其後一橋は東下し將軍は攝海巡覧有て阪京せとる五月閣老等相謀て小笠原侍從横濱に至り各國全權公使へ書を以て鎖港を諭す公使等大に怒憤し此大事件は我等果断為所に非ず宜敕本國に諮其當否を決す可と已に于才を動さんと為の勢ひなり同月薩藩士姉小路少將を斬捕へとる

○長藩外國軍艦と戦ふ事　並に薩人英艦を撃事

偖又毛利侯は砲臺を築き海陸共准備成攘夷期限を待処に五月十日米國艦沖合を走る長藩之を見より大砲を打放せば米國船狼狽逃去廿三日佛國軍艦又沖に来る前の如砲発す軍艦も砲発し暫時戦かふ中洪雨降雷鳴すれは佛國艦は逃行ぬ又二十六日和蘭船も砲撃す其後佛米両國共再来ておそふと雖も敗て逃去る同六月將軍御暇

賜り江府ハ阪ヶ東北諸藩と攘夷の事を議す茲ハ英國ハ先年鳴津ハ擊殺セトカ國民の復讐を為と軍艦十艘薩州鹿兒嶋ハ来り迫ル薩州執政之を諭説すれ共聽ず遂ハ交戰ハ及び薩兵英船の錨を奪ひ凱歌を上ル其後両國和親を成島津侯より人殺セリ贖金を與へられ又英人等奪ハれし錨を請更屢々成バ是も戻し呉トて斯て鳴津中將今般始末奏聞有しかバ嚴慮斜成ず薩長両藩へ厳書を賜ハル。

○長人幕府の軍監を殺す事　並ハ七卿長門へ落行事

這ハ幕府ハ威を示さんと七月蒸氣朝陽丸へ密監密使小監察を乗込セ中西國を巡視令む斯て豊前内裏港へ入と為を長兵砲臺より砲発し鳥バ幕吏怒て小監察を長兵屯所ハ進し詰問ハ及し処長州参謀高杉晋ハ仮令幕府の軍艦ハもセよ洋船模造の物ハ悉皆撃発ハ及べし何と成バ洋船を誤り見日本船と成不討して可成ん哉と當然理ハ幕吏今更陳処を知ず牧野村上ハ鎮西監ハて中根ハ毛利氏使節の由を陳れバ然バ赤間関へ来泊有べしと示て促ハ詮方なく幕船長門の方ハ進ハ海陸兵備嚴重ハて中根應接さへ為事能ず赤馬関ハ碇泊し翌日牧野村上ハ九州へ渡海し彼地の事情を探索而阪府し中根ハ鈴木と上陸し毛利侯の山口城ハ来り幕府の命を陳て後長門船水駅ハて浪士ハ暗殺セトカ

此頃幕府ハ薩長の如外夷交戰ハ及ヒとを怖れ諸藩人

私ハ鎖港攘夷の事方今彼等と談判中成ハ依承伏有無決さカ中此方より砲発致間布と達鳥バ諸有志其因循を怒て此上ハ御親征出輦を促す他なしと薩長両藩ハ迫カ之ハ依て毛利侯一計を設け大和行幸を建白有鳥バ朝議直ハ決定し其准備急王ふ処ハ俄ハ會津少將所司代と共兵士数多具て参内し四囲九門を鎖て参内を止め且長藩守衛士を除ハれ其後大和行幸建白の事ハ依て長藩悉皆く阪國を命セトれたり此時朝廷轉任免職有斯て長藩阪國の際三條中納言三條西中納言並ハ東久世四條錦小路壬生澤の七卿出京して容ハ長州へ下向セトカ

○和州天忠組の事　並ハ但馬銀山

此時侍從中山忠光ハ藤本松本吉田等の浪士と尊攘を唱へ天忠組と號し河内ハ同志を募ハ馳集つて一千餘人ハ及ぶ此ハ議奏國事掛の公卿より平野國臣を使として近日御親征被為有ハ付蹶起の所業致間布旨命セトカ然ハ京師ハ變動有を聞より已此ハ至バ不日幕府我等を征す可し坐て軍を待よりハと云八月下旬大和高取ハ進み城を攻ル城中之を防ぎ交戰成天忠組討ハ者多く大敗す幕府之を聞て紀州彦根藤堂郡山の四藩ハ天忠組征討を命ず兵進んて浪士等と戰かひ日を累さねて遂ハ勝利を得カ浪士或ハ討れ或ハ縛セトカ巨魁中山忠光ハ密ハ大阪へ走夫より長州へ下ル九

月中旬ヨリ
至テ一舉鎮
靜ス此頃但
馬生野銀
山ヨリ平野
國臣先ヨ
長州ヘ下ゲ
向ノ澤宣
嘉卿ヲ語
ヒ浪士ヲ
幕ヲ企テ集ル
京師ヨリ登ツテ攘夷御
親征ノ議ヲ歎訴セントス
幕府播州丹波丹後但
馬ノ諸侯ヨリ征討使ヲ命ス平野等妙

㊀京セリ
カ元治
元年正
月十五
日將軍
入京越
前中將
モ入洛
廿日將
軍右大
臣ヨ任
ス廿一
日將軍ヨ
參内致ス
可ノ勅ア

見山ヨリ旗龍テ討手ヲ戰カフ浪士勇戰
テ討死成者多シ或ハ生虜ル十月中旬ヨリ
ヨ鎮靜ス之ヲ生野ノ騷動ト云リ

○將軍再ビ上洛ノ事　並ヨ政令再
ビ幕府ヨ歸ス　爰ヨ十月三日嶋津三郎
久光復上京成テ幕府ヲ輔ケ急
ヨ攘夷ノ成功ヲ議セントス將軍
及ビ一橋越前等再ビ上洛有ン
事ヲ奏シ島ヨ朝廷モ先ヨ越前中
將土佐老侯召ヨ不日參内ノ旨ヲ
申奏ス依テ勅シテ將軍再ビ上洛ヲ
被命十一月幕府再ビ入朝ノ旨ヲ天
下ヨ布告ス亜國ノ公使鎖港ノ事ヨ
依万國列ヲ以戰爭ベキ旨ヲ迫ラヨ
幕府其答書ヨ困ム廿五日一橋中納言入㊀

リ此日
將軍一
橋會津
ヲ召ヒ
在京

諸侯を従へ参朝す公卿も皆列坐し中川宮即ち勅旨を宣給ふ其後又将軍を召勅詔あり其旨趣ハ幕府職務ハ内ゑ皇國を治め外ゑ夷狄を征す可ゑ泰平績上下遊惰ゑ流遂ゑ今日の形勢ゑ到深く聖慮を悩さゑ処将軍上洛以来各藩より國定建議も有ゑより叡慮を以て示來幕府へ一切委任被遊ゑ間政令一途ゑ出一心疑惑生さゑ様急度職掌相立申べき様就てハ横濱ハ是非共鎖港の成功を遂べく尚毛利父子脱走上堂の所置朝廷指令遊されず御委任の廉を以見込通り所置致べき旨勅旨有鳥ゑ将軍欣然と御受成て退出あり其より會津侯を陸軍総裁ゑ任ず越前侯を守護職も成す四月朝廷越前侯の守護職を罷め再び會津侯ゑ代む同月将軍参朝此日勅〻玉ひて是より政令更ゑ幕府ゑ任せん因て横濱鎖港脱京の七卿及び長門暴臣の所置速かゑ為よと将軍勅奉ず關東ゑ飯る嶋津侯も又西下せゝゑ

○筑波山結黨の事　並ゑ武田等加州ゑ投ずゑ事

同年五月水戸藩士藤田小四郎並ゑ田丸田中等正義黨の同士数百人烈公の遺志を継攘夷を主張ず宇都宮ゑ起同士も煽動〻太平山ゑ抵ゑ幕府近傍諸藩ゑ命ず藤田徒を征せ〻む其中ゑ有馬が兵士速早戰ひ始むゑ藤田徒敗〻て筑波山ゑ入又水藩中ゑ市川三左エ門朝比奈弥太郎等の黨有て藤田と旧怨有て奸黨呼成り此時市川黨藩主ゑ

追討請ふ諸藩主之を幕府へ伺ゑ許れ鬼ハ市川黨筑波山を追撃す然と利有ず日送ゑ耳幕府兵多勢を以攻撃成ゑ筑波山已ゑ促難く見たり又市川黨藩内ゑ在正義黨を悪或幽閉横斃す正義堤煎江戸ゑ至藩主へ哀訴成と遂同士三百名水府を脱下総ゑ至時幕府之留江戸へ入事許ず脱士ハ押て進とす依幕府水戸藩主へ鎮撫を命ず時武田伊賀鎮静為事を請藩主之幕府へ伺れ鬼ハ水府支藩松平大炊頭ゑ武田を従令可と命被依大炊頭下総ゑ至武田と共ゑ脱士を諭水府ゑ至ゑ市川黨拒て城ゑ入ず銃発せり是ゑ於双方交戰ゑ及べり爰市川等幕府へ武田を又大炊頭ゑ追自殺成しめ藤田武田を烈敷攻武田藤田と兵を併せ防と雖奸黨幕兵と共ゑ戰敗遂ゑ敗〻て北國へ奔然共北國の藩幕府の命を受遮ゑ武田伊賀遂ゑ加州候ゑ書を投ず降斯て明年三月武田藤田を始其徒数百人越前敦賀ゑて斬罪せゝゑ後四年を歴て市川黨武田が残黨ゑ終ゑ鎌さゑ

○長藩禁闕を犯す事　並ゑ正義の士討死

去程ゑ毛利家ゑハ去年八月京師変動の砌より皆尊攘の志氣を堅〻且武威全國ゑ振張せんと練兵怠惰ず宰相ゑハ七卿の寃罪を解参せ赤心報國を貫徹成んと屢々天朝奏聞為と雖未青天白日の光無或歎或怨て此上ハ強て上洛を成他なゝと其准備成折

柄脱士正義の輩ハ憤激心を発急ぎ入京而兵威を慶ひ天朝ゑ迫藩主及び七卿の宥罪且攘夷を歎奏成んと総勢六百餘名六月國を発て大坂ゑ至其翌日㊀

㊁山崎ゑ屯集し歎願書を朝廷へ出せり此

徳川

を聞て京師長州邸ゑ潜伏す浪士百餘名ハ夜中容ゑ嵯峨天龍寺へ移兵備を成す此ゑ毛利侯ゑハ浪士上京而疎暴の挙動成も計難迚福原越後ゑ五百人を共鎮撫の為遣さる越後伏見の邸ゑ着し奉行林肥後守へ鎮撫の為来由を達せバ林ハ此旨を京都へ注進す。扨京師ゑハ長藩伏見へ来と聞従會津一橋所司代等急禁闕へ駈着守衛を厳ゑし而して長人歎願書面を以朝議有鳥ゑ在京幕吏縉紳家抔長藩の成ゑ怖て願旨を許容有ん事を望井尹の宮一橋會津ハ之不可成と云長人を討ゑ若と専其准備を催す是ゑ於朝廷ゑハ一橋ゑ更ゑ守衛総督を命依即日永井戸川を朝使と而福原へ詰問し兵を阪國令て單身ゑて穏ゑ出願を為可と厳ゑ命福原即兵士を諭と虽肯ず依厳ゑ鎮撫を成可旨を願て両使を還す其後又朝議屢々ゑ而尹宮會津侯ハ征討決議を以奏し又有柄川宮始七十餘名縉紳家ハ是非御寛典の御所置施行と諫奏し諸侯も又等建白す然ゑ尹宮會津ハ益々怒て征

ぜんとす又長藩方ゐも衆議屢々ゐ而遂ゐ七月十九日未明ゐ嵯峨ゐ屯集する長藩進で下立賣中立賣両御門へ馳向其時一橋勢御所へ操出処往合直ゐ交戰相発て其後互ゐ勇慶て大ゐ闘爭成長藩進で宮中ゐ入す幕兵諸藩の軍勢ハ之を支て禁闕を守大砲小銃の音天ゐ響て百雷ゐ等く槍刀の光電光如く双軍死傷数不知更勝敗別たざりき。此時朝廷一橋中納言を召朝臣一同勝敗を問和を為萩藩父子の罪を赦んと有かバ中納言佛然と而色を變ド夫長藩禁闕を犯ぜバ朝敵也倶ゐ天を戴可不國賊何和睦を以為と言つゝ再下知して今天王山屯集の長軍鷹司の邸ゐ在を知野戰砲を放ゐ北風烈敷燃上バ邸内の長軍打て出て烈戰す幕兵之ゐ對ふて攻撃すゐ大勢成バ長軍討死なす者少なかゝず残兵山崎へ敗走す幕兵之を追討し猶市中ゐ潛伏せんも計り難しと破烈彈九を諸所ゐ打込燒立て探索を嚴ゐし怪き者を認れバ或ハ討捨或ハ縛し又諸方ゐ放火せしかバ市中一面の大火と成たり其火已ゐ六角の獄舍ゐ及んと為ゐぞ獄中ゐ在丹羽出雲河村能登平野國臣等の浪士卅三名を斬殺せり。廿日の朝薩藩天龍寺の長軍追討の命を奉馳向ゐ長軍山崎へ落し跡ゐ雜兵両三名捕へ天龍寺を燒却り。長藩敗兵ハ山崎へ追々集り軍議を成し急処へ會兵進で之を攻撃長軍敗して真木松山等始め名有勇士十七名自殺し逃走成たゐ者淀川又ハ大坂ゐて捕縛せりゐ。七月廿三日大坂

長州やしきを毀ち留主居北條瀬兵工を本國へ去りむ又九月ゐ江戸長州やしきも毀ちたり又幕府大ゐ諸藩の戰功を賞し朝廷ゐ請て位階をすゝめしむ朝廷ゐハ十八日の變動有しより鷹司殿有栖川宮中山前中將正親町日野石山等十餘名參朝を禁ぜりゐ。這ハ長藩ゐ通じ與謀有んことを疑へバなり

○尾州侯毛利氏の罪を問ふ事　並ゐ高杉晋作兵を擧ゐ事

斯て幕府ハ長藩輩下を擾乱せしをもつて朝廷ゐ請奉りて毛利家一族の官爵を削り長防征討の命を諸藩ゐくだし紀伊中納言を總督松平越前守を副將とし薩州以下廿餘藩の兵を部署し將軍もこゝゐ継で大ゐ行軍を起し長防ゐ入んとし又兵粮等の備へ嚴密なり。こゝゐ又八月五日外國軍艦十八艘長州赤間關ゐ來り襲んとなすこと甚だ急なり長藩も砲発して之をふせぐゐ其日ハ暮互ゐたゞかひ止む六日七日交戰をげしく遂ゐ長藩和を請しかるゐ洋人昨年の暴戰を唱へ若干賠金を出すべしとせむゐ長藩答へて昨年擧動ハ我なすところゐ非ず朝廷政府の命ゐよつてなすと勅書軍令狀をいだし示す洋人諾してしかしバ賠金ハ日本政府より得んと長藩井原太田の両重臣をいざなひ幕府へ賠金三百万弗をいだすべしと迫れり八月八日幕府紀伊侯の総督をやめ尾張大納言ゐ之をかゝらせしむ。時ゐ毛利父子書を近藩或ハ親藩ゐ因

りて呈し朝廷幕府へ謝罪有といへども幕府ハ長州を討んと決議有ゆへすこしも採用なし。斯て長州追討の勢十一月十六日藝州廣島ゟ着し已ゟ十八日をもつて進攻の令諸軍ゟつたへ其准備あり。時ゟ毛利父子ハ寺院ゟ屏居し問罪の師来るのそみつゝしんで命を待支藩吉川ハ哀訴為といへども幕吏未報をくださず然トハ長藩紛々たるより益田福原國司め三國老自殺す吉川藩吏又宍戸等の首謀十餘人を刑ゟ處し志道安房ともかり三國老の首級を追討総督の陳ゟ持参し藝州侯をもつて首級並ゟ毛利父子哀訴めこと を執達しけれバ此旨ちく一総督へ申上ありけれバ総督素より才をうごかすを非として寛典の所置を是となすの宿意成すよりくびを捻し吉川監物ゟたまひ戰期を止毛利大膳以下伏罪の誓書を徴しさきゟ脱走せし公卿を九州の列藩ゟ分置して慶應元年正月防長追討の師をまとめて大坂ゟ凱陣し朝廷幕府へ其狀を具ゟ奏報しけれバ將軍防長鎮定の由全國へ布告し不日その局をむすばんとすこの時ゟあたつて毛利の臣高杉晋作藩士の正義の黨罰し藩主を幽閉し國老を自殺せしめし事をいかつて奇兵隊をかたトひ内乱を起しさきゟ贖罪せしともがトを俗論黨と呼之を鬪爭なす事二日ついゟ俗黨の魁首数人を殺しそゝ餘罪の軽重ゟより各々所置をなし一藩方向をさだめ闔論の一ゟ帰る斯て亦朝廷長藩の内乱を聞之

を領定為と勅して將軍を召こと屢々なりやうやく四月幕府勅を奉ト再び長征を諸藩ゟ令し五月十六日をもつて大挙し征せんとす。尾張侯諫書を以てこれを止むと虽も將軍容ず。又勝安房守もとゞむ閣老等いかつて遂ゟ安房をうたがひ擯斥せり

○幕軍大挙して長藩を伐事　並ゟ將軍薨じて兵を罷事

慶應元年閏五月將軍京師ゟ入朝従軍凡そ若干万なりと云將軍即ち朝覲す天朝詔りして朕慶親父子を召若未時ハなんぢ之を按せよ未トざれバ汝之を討ゟ朕列藩を召て京摂ゟ有汝衆ゟ徇宜きゟ適へ奏して之を處分すべしと將軍勅を奉ト大坂城ゟいたる尋で一橋會津両侯へ勅し王ふゟ汝等大坂ゟ到り將軍を大輔すべしと二侯命を奉ト大坂ゟくだる十月各國公使等將軍ゟ請事有とて摂海ゟきたる閣老等帝都ゟ近くを憚り止といへども聽ずついゟ兵庫ゟ来りて書を出す之兵庫開港改め條約を請ふなり一橋侯之を朝廷へ奏す此時幕府ハ征長の期ちかずきゟ有ゟ洋人苟且決せざれバ入京して之を辨ぜんと云内外共ゟ切迫し大ゟうれひ疾病と称し職を辞し一橋ゟ軍職を襲めんと上表し並ゟ外國改約の勅許意見を建白せトゟ又一橋會津閣老等連署し條約勅許を乞。十四日朝廷新ゟ開港條約勅許成ゟ。十一月將軍永井主水を藝州ゟ下し長州の事を糺しむ主水長藩宍戸と會して毛利家近狀うたがふ可ものを責宍

戸具ゑ之を辨解す永井宍戸を國ゑかへして上坂す。慶應二年正月公武入朝して長州の罪を議し裁判案をなして毛利父子を禁錮し其族興九ゑ命じ家を嗣め十万石の地を削り首謀十人を出て之を處分せんと決議す。其後幕府毛利父子興九の三人及び支藩四家を召ゑ皆疾と称し来らず各々其臣を遣し命を受しむ而して毛利父子三人の代として宍戸備後来りけれバ幕府之を召ゑ病と称し令ゑ應ぜず依て幕府四家使臣を召小笠原壹岐守朝議決定の件々を命じ其主ゑ達し各家奉命書を致べしと云其後長藩書を呈せず益々防備を修め攻撃を俟時ゑ幕府ハ長州の所決を背を名とし朝廷へ征討なさん事を乞朝廷之を許玉ふ幕府命を奉じ六月朔日遂ゑ大挙して防長二州の四境ゑ迫り東軍長藩合戰もとめ双方攻撃をはしふして八月ゑおよべり偖又將軍家茂ハ大坂ゑありて征討諸軍を指揮為られしが先より病ゑ罹て自ら起べからざを知上表して一橋慶喜を以て嗣とし代て西師を総馭令んと請見バ朝廷之を危さん慶喜藝州ゑ臨んと為ゑ敗聞頻ゑ至り諸藩往々兵を引バ朝野色を失ひ將軍ゑ又深く之を憂ひ病愈々重し遂ゑ七月十日大坂行営ゑ薨ず年二十老中稲葉美濃守柩を守護して江戸ゑ皈葬す勅して昭德院と謚す。又明年贈官位を賜ふ。去程ゑ慶喜西征を辞して上書して諸侯名望有者を召事を議せんと請朝廷之を許玉ふ慶喜自ら書を作て京

師ゑ召ゑ多く病と称て召ゑ応ぜず然ゑ朝廷家茂の薨を以て征長の兵を弭んと令す諸藩ゑ布九月慶喜を以て宗家を嗣しむ。此時長兵已ゑ廣嶋ゑすゝめバ幕府勝安房守を藝州ゑ遣して長藩を諭て兵を解しむ。長將朝旨を重じ且使者の礼有を以て懇々衆を諭し命ゑ従ハしむれバ五日を隔てゝ西事稍平泰す。

○慶喜將軍宣下の事　並ゑ幕府政權返上の事

慶應二年十二月源慶喜征夷大將軍正一位内大臣ゑ叙任兼官故事の如慶喜辞退再三ゑ及と雖も朝廷許されず慶喜已得ず命を報す。同月孝明天皇崩ず在位廿一年寿卅七太子幼冲ゑ御座バ関白二條左大臣摂政たり。三年正月太子踐祚是今上皇帝なり。同月孝明帝を泉涌寺へ葬す。此時朝廷大喪を以て先ゑ幽閉又勅勘を蒙る公卿殿上人の赦免あり三月將軍兵庫開港の勅許を乞其後長州處分と二事朝議紛々とし。四月伊達宗城嶋津久光松平春岳山内容堂の四侯京ゑ入等く謂様宜く防長の事を先ゑして兵庫の事を後ゑ為べしと斯て廿五日朝議遂ゑ決し令を天下ゑ布て云防長の事大樹及列藩の奏議ゑ従ひ將ゑ寛典を以て之を為處とす衆宜く其意体し所置宜さを奏す可し且兵庫の事先朝曾禁ぜるが近日大樹列藩更ゑ建議為処而して在京四藩の意も亦同けれバ情勢切迫万々止得ず新ゑ其開港を許す宜く厳ゑ組律を立て以て後害を防ぐ

可しと是に於て長人罪狀の榜文を除く。廿七日山内國に飯益々時々艱難を憂九月書を作て將軍に呈す其臣寺村左膳後藤象治郎福岡藤治に齎し上京せし已に代て之上申し將軍に政權を朝廷に還し事を勸し む。又松平安藝守も將軍に建白して其政柄を解ん事を勸む。將軍も已に深思遠慮為処有ば是に至て意を決しけるぞ十月將軍大に烈藩將士を二條城に會し飯政奏案以て之を示し意見諮詢代の將士狐疑すれ共薩藩小松帶刀土藩後藤象治郎岡山藩牧野權六宇和嶋藩都築壯藏等同声に之を已し て衆退く將軍特に帶刀等を留め縱論令め議決急ば即日疏を具し之を奏せ ん。朝廷公武を召將軍奏事を大に廷議し遂に今月辞職を聽れ列藩凡五十餘侯を召新政を會議す乞利父子及支藩も入京せ り而して薩土藝の三藩禁闕を衛守護職所司代等を廢て權に柄川宮を總裁とし三條岩倉中山正親町等を議定と成小松後藤木戸等を參與とし政治を総括令む

○伏見鳥羽合戰の事　並に東軍大敗の事

去程に薩長土を始め復古尽力する諸藩等參朝し德川内府如何成変お生せんも難計と宮闕を守護成バ德川將士ハ二條城中に據屹然と而相對洛中大に騒し十二月十二日内府臣下暴動有時ハ輦下恐有故に暫く大坂に退き鎮定せんと書を朝廷に止め

士を率ひ大坂城に入其後朝廷會來の兩藩嫌疑して入京を禁ず。此頃江戸に浪士薩邸に屯集し市中暴動せの報有内府怒て追捕の命を江戸に下す。是より德川島津相敵視せ形勢也時に議定參與等相議德川氏に課し其八百万石を割て經費に充可と山内容堂曰德川所有耳収んと変公明正大の所置に非諸侯已其幾分の土地人民を貢献せ可と衆皆此を可而決議せ依て尾州越前兩侯大坂に下て朝旨を演述か小隊輕裝して上京有可と内府之を令兼せられ二侯京師に候る。其夜會來及び諸將等内府入朝し玉ハ ど臣等敢死之に從ひ君側姦を除んと誠内府其意に決し遂に明治元年正月二日卒に其准備を成て會來兵を先驅とし同三日伏見鳥羽兩道より進む。在京藩士疾に之を知朝命を奉し兩道に東軍を迎る戍兵晋バ支へて入せ然に東軍大勢逼來つて官軍変急成を見大砲を連発せ從是双軍砲戰成伏見鳥羽に大攻擊と成て其日暮に及迄勝敗決せを夜に至て官軍奮擊突戰成に東軍大に敗北し討る者數知せ。四日又兩道に交戰烈く鳥羽の東軍鉾先光て進て京に入と爲時總督仁和寺宮錦旗を翻し進玉へ官軍大に勢ひ增遂に東軍を退退けるり。五日東軍の淀城に集るを官軍押寄攻戰るに東軍敗し又退き遂内府ハ會來以下の諸將と俱に大坂を去て軍艦に乘て江戸に走り殘兵思々に逃去るり已にして總督宮ハ大坂に進んで鎮撫せらる故に五畿関西平定せり

○官軍東下慶喜恭順の叓　並に田安亀之助へ家督の叓

明治元年正月十二日朝廷徳川内府以下東軍諸將等の官爵を削り且四方に令して東征師を起慶喜等が罪を問可とて有栖川宮を総督と成錦旗節刀を授け玉ひ諸藩の兵を徵る廿五日外國人に今より京師を以て日本國府と爲へき旨を達せらる三月天皇大坂へ行幸有て海軍練兵天覽あり。去程に諸道の官軍道を分て関東を攻め進む其報忽然江戸に達徳川旗下者ハ固より譜代諸藩士等相聚り軍議を成折柄新撰組の輩ら確永西根を固めと内府に逼と慶喜前非悔悟し只謹慎恭順を旨とし更に衆議を斥け用あず唯勝安房大久保一翁等に密旨を託し自ら書を作て臣属に示し不日官軍下向爲井必ず抗もべからすと命じ遂に上野寛永寺へ屏居せらる。偖又官軍ハ路次諸侯を攻伏令て督將岩倉具視ハ板橋駅に遂に着し大総督有栖川宮ハ駿府入城せらる。是より先慶喜ハ歎願の書を朝廷へ上つらさしむ御採用無上野輪王寺宮慶喜を懇と執當覺玉院を従へ駿府に赴き願に哀を乞慶ハ和宮に乞亦総督官に天璋院ハ参謀西郷隆盛に共に女使を遣さ是各々請ふ一処有り。斯て東海先鋒大原已に品川駅に至ハ徳川の臣勝安房品川に到参謀西郷に面會し主人慶喜か恭順の意を陳江戸攻撃の叓を止らさんと請ふそ隆盛謝罪の實効を篤と糺さ是早速此旨総督宮へ上申に及ひ慶ハ

総督衆議有て諸軍に令を傳らさ遂に江戸攻撃を止られさり。四月勅使橋本柳原の両卿江戸城に至て田安中納言を召て宣旨を命ぜ田安慶頼謹而拝受せられ即日慶喜へ達せられハ慶喜謹て令義し進背なき旨御請ぜ夫より慶喜ハ従者少々召連水府へ移り田安家江戸城に有処の徳川代々の什器書類を上野へ送り本城を明渡せり。閏四月徳川亀之助を大総督より江戸城へ召ぜ左の通り命せらる慶喜伏罪の上ハ徳川家名相續の義祖宗以来功労を思召ぜ格別の　慮を以て田安亀之助へ仰出ぜ候叓　但し城地禄高の義ハ追て仰出ぜ候叓斯御渡ぜ且松平確堂に後見を命せらさり。其後五日に至徳川亀之助駿河府中の城主に命せらさ領地駿遠陸奥にて七十万石を賜ふ。又田安中納言一橋大納言を自今藩屏の列に加らる旨を命せらる。是に至て家祖家康江戸に覇府を開しより慶喜に至迄世を傳る叓十五代歳を歴叓二百七十餘年ありと云ふ

明治二十年一月十五日出版御願
同　年三月十日刻成発兌

定價金八十錢

編輯人　京都府平民　藤井重太郎

出版人　上京区第五組内藤町五番戸　京都平民　中村朝吉

賣捌所　上京区第三十組丸屋町六二番戸　二条通衣棚角　風月堂
御幸町通三条上ル　風祥堂

205073-000-7

特64-721

絵本徳川盛衰記

風祥堂

M20

EDV-0074